# 八代集抄

拾遺神楽
巻一二三四上・十八

特別
イ4
3163
104(18)

神楽哥　かくら乃初ハ
（日本紀古語拾遺等）
にあり彼岩戸の前
にて猿女哥舞を
奏するなれは今
も内侍所清暑堂
に神楽する時此意を
さかきえたに木綿しで付（引云）
て採物哥と心得へし
但深秘抄にはゆふ
しで雑楽の神乃
ミむろともあかれ
きこゆハ見つかれてし
神のミむろハ清経
ゆふかゝみのなかにけりし

# 拾遺和歌集巻第十

## 神楽哥

さかきはにゆふしてかけて誰世にか
神乃ミまへにいはひそめけん

さかき葉乃香をかくはしミとめくれは
やそうち人そまとゐせりける

ミてくらにならましものをすへ神乃
ミてにとられてなづさはましを

ミてくらハわかにハあらすあめにます
とよをかひめのミや乃ミてくら

貴
14
3163
104(8)

一条禅閣抄云此哥本ハ郢曲なりうたふ時皆末を吟する也それハ榊
葉乃香をかくはしみとめくれハやそうち人ハ諸乃氏人也まとゐ
あつまる也神あそひするをいふ也
みてくら家なりし　一条禅閣抄云すへ神ハ皇神也是ハ天照太神
乃使まつりあつさするハ別むつまやかし神楽ニハあつさゆるゝ
みてくらハわかにハあらす　一条禅閣抄云みてくらハ御幣也とよをかひめとハ大
ひるめ乃尊天照大神の御事也　神楽哥ニそおの方宗此方本也
あふさかをけさこえし
それハ榊杖の意
決明なるへし
よも山乃人のさうれ
此哥神楽ニ四方山乃
ちかみおむ禅閣弓神
乃宝よ金立つるハ
ためり一禅閣抄ニ四方

あふさかをけさこえくれハやまと人乃
ちとせはけくきれるはえ也
よも山乃人のさうさするゆみを
神乃みまへにそたてまつる
いつれのところやかたこれあさまる

---

山ハ四方の山みなうち
らくハ題目世界の人をい
ふなり
つるきのみやかたこれ
一禅閣云つるきのみちなれハ
太刀布留とハ
雨の名しうこはある
男子をいふなる
小若きところて舞を
する男といふまゝや
くちれとハ太刀乃帯
太刀乃名まくらきてをれハ宮源ハ宮者乃名なるへし
志ろかねのめぬきれ　禅閣云ねるハあゆむやうなるを一説ニねるハ歩を云
わかこまハいとやくゆかん　あさひこハ朝日子なり宮さすハ玉篠の
せかさるりゝうへま日影さすあらやし日影さす岡への篠の上なり哉

たち乃をとこて　哀源かよたん
志ろかねのめぬきれちをさけはきて
なら乃みやこをねるやたかこら
わかこまハいとやくゆかん　あさひこか
やへさすをかれさゝ乃うへに
さいはふしそうめんあふかれと
うつろひぬしつくうめてそ

詞をくゆけもりせいつかの宿をとらんほさむとのさすや塁への弁海の上にも
さこゆにさろかん道弥是れ前弥の事く一体庇後多さいうわハ神事
也さいゝ前に前口部とりかりをハ数に万葉にとりゐるにハ数置に
膝の字んをとかとよむ又をまとよむさほろめんハ数の花に降るせし
志らつゆのみをりの木原
志ぎ々居名あの
枕詞く袖中抄にあり
頭ことなきつもらうかな
らすいい弁神ぼまて
いつ志をとるやゆゑの
かりはをいうとひて
ふる鳴りね音ハ面白
きさきらぬそとど
にえり一体（フシ）物に云
かりくハ又信ふの木

志らつゆのゐるれふりつゝひわける
志きり（イの）をねろとかとしろきさる
すみよしのきしもせさらん柏ゆへよ
ねらくや人りまうといされん
あるゐのいとくすみよしの明神
乃さくせんとう
従三位敏子
左京持高遠鬱蔵りゐねら

乃きる原へと
すみよのきしも
須磨の岸をとひらけて
来らせね拍枕とせ云
こしハ御宮も下向を
人ハまぬ抱ゆへによせ
くとも待し名を立
らむかとも おまちへ
てし
ゆふまきゆる秋ハ
ゆふけハ生もるぞ
本縄てとさに検束
のあけさをハ秋りまき
まゆかにふらとけて
あんとし口訣
あるてるけり人の今の

うすてらるをそてうなすにみへやかよ（きせ）
まらくちゑやさきるるをの文（神まやきる絶）
をかてまさてをつくるをあけて
見待ちれハかくくさく待ゐるその（ゆふまきのきさし）
ち大蔵りあわて待る（大宰のすけし）
ゆふとききかゐるつゝとハわつりり（かる）
楼ぶけりとけくかんをきれ
住吉よまつて　安法法師
あまてるかん今のおひをひと
なりへハひさうしすみよし乃松

奥義抄云あら人かミハ垂迹也袖中抄云現人神（アラヒト）とハ天子のかたちてあまくたる
るなるへしとそ業雅古今序注云え八住吉の神事に相生の松といふを
よめるなりとも是案註に住吉ハ神功皇后神勅によりて祝ひ奉られ
ハ住吉の住浦に祝れ給へる事なりと伝へたるゆへあらひと神とよめるなりさて
住吉明神の住吉浦に祝はれ給へるより此松の神木としてねふせる事を云ハ
久しき松かよのためし万葉六かけまくもゆゝしかしこし住吉の荒人神
の舩の舳に下居是本ニあるなり

我とハゝ神代のことも
神代のことハ住吉明神の
日向小戸ノ橘ノ檍（アハキ）原の瀬
にあらはれて住吉に
浦に祝れ給ふなれハ
さしていふなるへし
箱崎　古戒定恵の箱
を埋めるゆへ箱崎と
いふこと箱の字なるへし

恵慶法師

我とハゝ神代乃こともこたへなん
むかしをしれるすみよし乃松

箱崎をよみて　重之

いく世にかゝたりつたへんはこさきの
松乃ちとせ乃ひとつならねは

---

松をうへてあり今ハ八幡宮
乃神社あり又箱崎の
縁起ニハ白幡四流赤幡
四流あまくたりてわたりしを
るに松を植ありし
松ハ八幡の居名なると
いく世にかゝたりつたへん
箱崎の松幾本もあ
れハそれ〳〵千年の松なれ
世ゝにかたりつたへんとも
おひしけき平野の原
平野第一御殿源氏の
祖神なれハ源の兼古の子をよそへて平野のうちのおや松とよそへり
おや松ハちゝにたとへこき紫ハ三位以上の袍也位もあれよの祝言し
ねきかくるひえの社の　神にねかふ事をねきことゝいへり日吉ハ大三輪神

源兼古朝臣こうませて侍ける
より　ときすけ

おひしけきひらのゝ代おや松よ
こきむらさきをたちかさぬへく

侍従実国

ねきかくるひえ乃やしろのゆふたすき
くさのかきはもことやめてきけ

也草のかきはもことやめてハ中臣祓ニ磐根（イハネ）木立（コノタチ）草乃垣葉（カキハ）毛（モ）語止（コトヤメテ）天とこえ
延喜式遷却祟神（タタリカミヲウツシヤル）祝詞（ノリト）ニも草之片葉（カキハ）毛（モ）語止（コトヤメテ）底とあるハ神代ニ
芦原中ツ国乃邪神ありて岩草木もおのれと物いひしと天津神使をくだして彼邪神
をきつめ給ひしより日本紀ニ何をもいはず後ニかくいふことを禁め給ひて
今日ま乃神社ニ祈る草の片葉（カキハ）も物いはずよく受てとし
片葉ハ只一草のみの草にて
てもいはぬぞ
おほよどのみそぎして世
大淀伊勢也神さびて
上久と云年ふりたるき
ことハ此御歌ニや屏風
大淀の松ハ縁ありとも
みそぎするかな濱
うけひくハ年引し細
に月と詠あれども此濱

おほよどのみそぎいく世になりぬらん
神さびにけるうらのひめ松

恒徳（ガウトク）公ノ家障子　源ノ兼澄（スミ）（かねずみ）鎮守府将軍信忠男

栗田右大臣家乃障子より（栗田関白道兼公也）切るさきまで（昔の孫也）
禊してうしろまおもひくりつ
かゝる雨　平祐挙（スケ）

---

後を神のうけたまふ
としろくく網のうけ
ひくとし従字なり
ちはやぶる神のまもる
神乃法勢命ハ無
量なるをいふなり
おほやけとハ帝なり
むかし君をいのる心
をこめてよめるなり
ちはやぶる神もえの
冨士のきゆるハ神も
おもひのあるやと
也冨士ハ浅間大神乃
垂跡乃よし

みそぎするけふからさきにおろすあみハ
神のうけひくしるしなりけり

題しらず　人丸

ちはやぶる神のまもれるいのちとハ
たれかためにかながくとおもはん

ちはやぶる神もおもひのあれハこそ
としへてふじの山ももゆらめ

安和元年大嘗会風俗かしこの山（冷泉院年号也）
大中臣能宣

大嘗会風俗　大嘗会ニ　君か代乃なからの山のかひありて

風俗（フゾク）歌とて御事毎
近江丹波を悠紀（記）
あまき所の名を詠して
作者に歌よませて
楽所（ガクショ）に下されて楽に
うたはする事なり八雲
袋草紙等に委し
君が代の長柄山の
風聞にきこえて所のなを
居るとて君か代乃
ながき名所か山なか
ひあるとみるとも
作る歌の詞の題
並びは近江の名乃
枕詞也心は明し

のどけき中れみまかきさうたる
作者乃あつれ山乃あたりて
よのことき君か清代乃郷
いとうやま　まつ人ありす
うこきなき黒髪山の君か代なを
そらひたときはくる世をとこうつし
みかしのやま　よしのふ
ちはやふるみるとしれ山乃作りきそく
さくらうさるすゑのよみまくるよ
まさひくらす

---

うごきなき黒髪山
黒とは常なれこと
ひさしさつゝ世とこすゞ
つゆともなき黒髪を
近江蒲生郡なる
山城よも何れと別し
ちはやふる千しまの山乃
説明し三上は近江の元
正天皇御宇に武神天
千かて坐高神にも祝
下り日本第二の大忌也
よろづよをかけつね
ころもきてし
よろつよと三上の山れ　足も高山乃百家をよりひくもし野洲河ハ
三上の林麗し　拾遺記に黄河千年に一度澄て賢人生るとこそ云ふとぞ
みつきつむかくら山　大嘗山近江也　大嘗會に詠の　詞つむ心にて詠也

よろつよにかけてみゆるかのきさきなへ
みつしれ山のおかるあかり
うとまけ
よろつよをみつちの山のひくゝみえ
やすれ川のすみて何ひかる
かおくら山　よしのふ
みつきはいおくら山ハときえてそ
いろもしかくりすよろつよもや（ヤイ）へん

ことしよりやみかみの中山
近江国野洲郡水尾とも
社ありて八枝木とある
やまの代並苑八千世と
祝ひてよめる苑
みかさなる山もさらく
聖代の民ハ民も明
徳を仰ぎまつる世とふ
幸ある人ハ明徳を
仰ぎて治代をよ
の御心なるべし
千とせふる松の詩
色も近江の鏡に
千年とぞ云ふやまなる
ことにむれ松よと

みかみ山　よみ人しらす

ことしよりみかみ乃中山やすみそて
はるかさねよちよまれあまくもに

かゞみ山　よしのふ
同

みかさなる空もさるかゞみやま
くもりなきよハ代りあかつきのさ

松の緑　清原元輔

千とせふる松のさかえハむれゐつゝ
こゝろさくあそふてうたふかし
おほのくさま　かねもり

さゝめる時もあしら
おほのハ御膳のれそ
これにむせく御酒を
さゝけて何ほと守き
幸ぞよめる
千世能山　丹波国桑田郡
こゝに千とせの山ハ
大嘗会ハ御代の初
めハ今年より千年
こせ山かよ業よりの心を
おもひするいやたかの山
称高山　偏中向
名あれども近江と
よめる心明と

さゝれるもあしもあらす千とせある
おほのへのちよをひつきそ

天禄元年大嘗会（タイジョウヱ）風俗（フウゾク）千世能山（チトセノ）
円融院年号と
よしのふ

こゝしおもちとせ乃山ハこゑさそ
きみかこゝろのとうハのみへてある

いやたかの山　かねもり

おほみなるいやたかやまれさのきそて
きみかちよをいのりかささん

みかきの山　よしのふ

いかなる千とせ山
山乃かしハとよみけれて
いるハいかなる音
千年の法は社堂よ
つくもし作りし山の趣
くもゐにハそびえる山
おのうこきなき岩
花山のうこき太くさ
万代岩の動なき也
よろづよをあまする
百年ハ明らかんする
千とせのゆかり千年の類
塵ひとの恐けれし
こちらくし
さりともとこのひも

いかなる千とせ山乃かしハ　おきなハ
ちとせ乃けふりかくてはるゝん
いくよ山
くもゐにハそゝる山ぞよろづ代を
うこきなくの千はまんとうたふ
やゝ千山　中務
よろづよをあまするくらん鏡山
ちとせ乃影もちりもくもらし
おかみの里　かねとも
さりともとこのひもえてわかおかふ乃

ちいよしハ千年
しる穀成就の事し
このひそろわハ蚕飼
とよく志ゆるもよ
穀ゆたかにこのひ不言
りつねに国民の寿き
あるし大宮ら小寓
宇鑑定わるるや
大宮里ハ伊豆の智郡
名にたてるよし花里
名を吉田といて
いつみ川のゆきさ
心明し
はるのすむ松の時
鶴も松をる年乃

さとゝめてしく　おもかゆるゝ
よしだ乃さと　（山城の吉田なり）
かすてるよしだ乃里の松までも
はくともつきしきみかよろづ代
八洲千代　（是も山城の泉河なり）
いづみ川のゆきさまれうこまれハ
ことしハのけりすみすまさかるる
いづみのさき
はるのすむ松のさきさまハあへくる
ちよのさめしをみえするまちもり

なかれいてたるを
世とし枕乃まくら詞

延長四年八月廿四日民部卿清貫の
六十賀中納言恒佐か妻志侍る時の
屏風にかゝする哥のうち
つらゆき

あしひき乃山はさかきはときはなる
かけにさかゆる神乃きねかな

あしひき乃山は枕詞
神楽乃宜祢か榊の
ときはの陰に栄ると
し神楽を奏す是八
まひなけに捧せる称
祝ふ乃意常ゆつきさ
神乃宜祢ゝもそと
おもしろきも
おほなむちすくな神
童蒙抄云万葉七ニ

とひまくらをよみ侍る
人丸

おほなむちすくな神乃つくれりし
いもせ乃やまをみるそよろしき

延喜廿年亭子院乃かすかの御幸
侍けるに奈良乃ほとりにて一首哥
よみてたてまつりける
藤原忠房

めつらしきけふ乃春日乃やをとめを
かみもうれしとしのはさらめや

あるは大穴道少御神
こかけて御神の作を
まつる山とそいへり
せ山紀伊国にあり
愚案万葉七羈旅作に
あるも下る歌なる
妹背の山をよめれは
吉しとこそいへり是ハ
日本紀第一ニ夫大己
貴命與少彦名命
戮力一心経営天下
これはあまくたりの命ふたりしてするといはれてこ
ころをあはせて天下をはくみのこと妹背の山にして経営すとれね
ゆへにやよめるならむ也少彦名命とする陰詞といてる
なれつき大和守にして忠房し卒去延喜十二年任大和守廿年と云て
めしきなりの亭子院乃ねそしま御幸のもの八幡なれいなり

天暦御時哥合　村上天皇乃御時也袋草子に天徳哥合といへるそれなり八雲御抄に天徳四年三月晦日乃ことゝ見えたり

恋すてふ我名ハまたき　恋すてふとハ恋すといふをいふ也またきハ速乃字也早くも也人しれずと心乃中におもひそめしを早恋するといふ名乃立たるよしと云宗祇百人一首抄云そめしかのかハ如此そハなしとおもひしが也そめしといふに侘あり　愚案袋草子云忠見ハ貧（ヒンヘイ）敝なる田舎に住着也しかるに天徳哥合乃時勅として召上られて朱雀門乃曲殿に宿て田舎乃装束のまゝにて柿乃小袴衣を合せ着て肩に懸（カクト）て此時乃うたを家集にト云（テク）は乃のぼりしに此歌をよめりとこそかゝるべきとき時の帝きこし召て召上させ給ふ乃ちなと　下畧

しのぶれど色に出にけり　宗祇云隠しわびたる思ひハ出てもひしと人乃ふ審するにしれてかくもいかでひよりあらはれるかとうちなげき

てやうるむまゝり宗長聞書云恋乃切なる程をいひよまれるさまを今とりなしていへるきこゆる也

袋草子云天徳哥合乃時兼盛歌冠を以て参陣て終日伺候（ス）成ぬれと名をよばれるをなかなかわる恋ハとに哥読平とやかく案じて退出せし自餘の

拾遺和歌集巻第十一

恋一

天暦御時哥合

壬生忠見　忠峯子

恋すてふわか名はまたき立にけり
人しれすこそおもひそめしか

平兼盛

しのふれと色に出にけりわか恋は
物やおもふと人のとふまて

題しらす　貫之

哥乃勝負をと不執
ることすまひろけ惜ん
哥とまむく勝ね
あ首より弐代集に
双入百人一首亦定家
いろすへらつるかり
は争は撰集より
自分の心をえらび
入させらると入心を
時集と云の
まの川も況ゆすぬ
恋名と歌撰乃備
に君据されハかく
恋よりて得名
ま傳ていえさんり

いろまくでうつるハかわとしるあそばし
おもふこゝろをきる人乃あまさ
女乃心よくはやきもしはやきし
かる

平公誠（陸奥守元平子　周防守従五位）

志のふるも況ゆへすぬ物なれた
今ハあふみもまみすりつゝさてん
よみ人しらず
あけきあかつはぬるよもふゆ出ぬべき
いたゞきも人乃志てハらうさまなん
あふすをまつまて年のへぬるかな

---

とてかく和歌ぬるゝ
まけきあかつきぬるを
いそれハ君もうらまはれ
なまいで云和せんとも
あふすをまつそれ
年月ひとつゝを待
それとりこ松をうつて
年のへぬるとよめり
なとにきく人の心を
人の心を付るとよて
見れとも恋はとぞひ
みはわ縁は常陸
あまの代やさへ乃かれ
序の恋のゝ
てはしみえ

身ハすみのほりかひぬおちゆく
なとりきく人に心をほくはの
みずとひしきえすもあるゝる

人丸

あまの川乃やへぐもがくれなる神の
なとりのみやいきくわするへき
よみ人志らず
見ぬ人乃恋しきやなにおもへる
これよの志らん夢よりみんゆくも
夢かるゝ恋しき人をみえるせつる

見ぬ人の恋しきや
見ぬ人の恋しきハて
せゝすうさとひ夢
うゑそもえぬ人気れ
ハ猶とかく思ふつまりも
夢ゆわり恋つゝ又を
今ハおゝすると八夢
会ようひけく恋しき
人ゝ逢ふ人なれりとゝ
かくてのゝはかゝの海
ゐ被海の流るゝよ
うにゆうてとゆへんで
ゆきく今も思ふせて
かくてのとゆるつはん
りとしゐ被ハ我中も
よゝうのしめてや
古今ニ人思れとも云て

いまはあゝする人をはゝさまん
かくての身はかゝ乃海れなちかねつゝかわ
よるふるきはくとひやせさん

藤雅正

餘所のみみえくやハ恋ん人ゐるの
すゐはむ花乃いろかとてもそ
ゆきしてかもとめよいひそしめ

権中納言敦忠

待るゝ待るゝとき
身みてゝのちの心乃さらふれは
はやかりいろゝもいとねつきかる

若し紅の末摘花の
色ゝは出ろんけ物を
うけてよるにのゝ説
や八恋ゐ一つきるゝま
出ずハ待るゝ乃さと
物をゐくやする
身のみてゝと念の
心ハ明侍従ハ五位なれ
ハ赤衣の身そてるま
をせぬつきとよ知わ
いろそ八思ふせる也き
人気もさ思ハゝま
も出るゝれハいそ
知せらめんとし給
乃こゝろ同おし
いろかはつ歌ゝ字

待るゝ待りる時ならしめてつゝ
そゝゝる
ゆふまさ

源邦正（式部卿重明親王子）

めやい
いろそハ思ひせなむつきん人思れとて
物ふゝろ乃いろかいてすそ

権中納言敦忠

いろてゐかくおもふてゆえとをさりよ
人はてゝてもかり思ふぜん
（兼補し）（本云 桑子弾正尹章明親王母）
はゝみ乃中納言乃とやすん物を
見てはりゝゝる

小野宮太政大臣（實頼公）

此歌ハ撰ニ出して佐こ
匣殿乃別当よれる
らみとゆて父の在名
せいしれハよ行か但
集そて八未逢つお
こゆてし心ハ明し
はきこひしまつまよ
わつふみそてよわ清西
きみとまつせりやとし
あらくらし裏心ハその
まハとけと里ふ宮を
見くさわとうけく泡
いそくるあ秘とれは
よのるへ八雑難しと
みるとも出るあれ
そうといふ人序文

はなこひしまつまゝ人をこゝのなかの
きしのうまもましせてしかな

かへし

おくらしとなふ心そこ川のなかされ
よそふる人乃こゝのまれぬか那

といふても　よみ人しらす

みなそこ出る清水もかねのいかなる
くるまきぬとこひをよみかぬる
おかぬ川くみすいかみかれさゝ
見なれぬ人もこひしかりかり

---

おかぬ川くみす秋の
みなれぬ人ハみつ別し
斗しらえあれぬといえ
こかれ序ぬく
みなそこにおつるむも
序言之事もひさ編
り心をよせて此歌ハ
こひしきとく
そたのみきつる庭
庭といふへき事り
きて君六ちてさり
よ人の雅をきさよて人
されもよ秋しと
いかせん命ハかきり
限ある命の内に切（ぜつ）なる

人丸

みなそこにおつるゑも乃うらをひき
こゝろをよせてこふるこれそろ

よみ人しらす

そのふのみきつる庭を人忘れて
はまるきひとよまてひぬるや
いかせんいのちハかきりなる物を
こひハわすれても人ハはまなし
女乃ことは男乃文はかつくる
にあつすとせす給られそ

無ハ死とてもなき人
「雖有てもあらんとも
志られねハうけせんと
歌也荘子ニ吾生也有
涯（カギリ）而知也無涯以有（ヲ）
涯随無涯殆已（ノミ）
山ひもろくねか山の
こゝくねとハ女乃名
事せねるう心消し
やまひとハ君も
心消し
おしひきの山下とよし
山下のの響ハはわ
かねねられハときろう
とももくの序あり

山ひもろくね山乃よふこともり
わまひらの千ちきやわらん
さい志てと
やまひこハ君もみるらん歌ふ
わりこゝろせねハやと津れとせす
おしひき乃山志てさとよとゆふの
さきらうともなくこひわたるや
いふもく志りわすれん命なる
何かハおふよれおなもことすれ
ねきそする洞乃玉をとゝめるやと

---

いふして志り見れん
かやふ六ひてハ死ぬへ
くれハいふして志り
見れてせのひ気死
すそよゆくハ玉ふ
世もゆふへられたとも
ねきそする洞の玉も
玉緒ハ志りし玉のと
ゆてゆらんとハそう洞
の玉をねきとやせ見
こし

いまれをそりおもんといそらん
岩乃うへまちる小松をしひきられと
ねをねるきハきみそまそるる
こゝろもおふよ何をくわてのほ
こ乃わかまハひそるるせもるし
九条右大臣　師輔公
さゝにの千年ハへぬれと昔さう乃
心ハくもれうつりの千ころ

岩のうへまちる小松
根の岩やきとり寝覚きをとりてし
こゝろてもあふよ　はわかとハ多逆流をいつるらむ
さゝにのち年ハ　雲乃上人をころる哉も鶴阜に（さえ）鳴くすお泊

おかうハ冬くさち
わかりよ便さるゝ心ひ
ゐふきころ世ハ附ある
りとふよ寒ハ尽くら
ねハ極ハ寒ハ尽さわ
りわ我ハのとすりさし
無ふれと狂ふのさう
人めハ無へと心へハ私
こゝ人々とさふし無乃
男をえられねとし
あかれともなつ物を
すなるこゝハ我さもさ
りよ我ハ心の下消え
出て月日すゝとし
雷の孫作そし渡り

よみひと志らと

おかうハ冬くさわかなる月
志られこてちもわきの千すする
無ふれどあれど志ぬくさうおも例れ
こひとりふらの男をしさうねハ
おもこ乃よ千くとせて侍る
あれれとも留りし物をしる雷乃
志さうきしはく狂をふるゝ

かへし　中務

引しもおしきてねる雷ハなひもあし

---

引しもあくさしねる
た丶に消つと上るさと
のやろるし男を無すよ
つ千こちハこうう歌すゝめ
やつそ侍る雷ハひらとも
よらぬりなひこね
すもひ命も逢ふまへ
にうけしわ逢ね得よ
無死なハりふへるよ
いふもも無ね死ぬる
極みよの心らへ
出もてら我無やまん
浅間の煙ハ絶ゆとも
我無ハ尽らし浅
間の神われハ富士権を
見し富士と同神と

男をはけ千くこちあされとかたしめ

読人志らす

よすかりなひこねりよ無しらえ
あかりつるゝのちらかいさん
いつとくの我無やまんちをやる
おさまれさけ乃ひわりさゆるも
大原野まつり乃日参りさて（二月上酉日）
女乃しふはうつとをく

一条摂政　謙徳公

おかうし乃紙をしるもん我無え

おほきみ乃神も知らん
我庭ハ神も知ろしめす
わかみのゆくやうり
主なへとし民人とえ
我君恭原にあれえ
し神よ世を比たもし
さりき世のまゝさす
春ハ流ホ常るは
あれハまさす松の
あまさ何れハらし
心ハうまその恵一
てこ向ねハ見とろ
めれあゆる拇も悔
らしの心
あめつちの歌す

えふ民ひとれころやかあん
あし　よみ人志らす

さりきさ楽乃春さす松の数あれハ
とりむるかこともあしとりやあ

詠てす

あめつち乃神ゆきるゝん君かさぬ
おりふこゝろのかゝりまんれそ
海もし何さしふしれとあし我庭を
あふくよろへらくきみよいてんやし
ひとゝわ

---

て耕作秧を起てち
りてる心し
海もあさしらんも
我庭ハりよろへん
拇らきさ心し
かくらの光のき沼の
唐介し光泊の沼
乃のみ器よこのひ
みけく心の中より
のし恵傷りて宜
るしもあき心をより

**大嘗会の御禊**

一条禅閣乃おほ云大嘗会とこふれんとて其の十月よ比ゆきて豊(トヨ)の陛
禊と光なし世俗にハ河原の御ふるへと云二条三条の河原に幸ましてと
こゑふるこゝ（下略）
あまきこしとよのりふの此禊をあまさるる人の中よ君一人我よ拇

おく山乃岩かきぬまみれみこゝろハま
こひやわらんおふしをあるみ
大嘗会乃御(ゴ)禊(ケイ)よとものしる
不可わるハ乃結るるを見て
み乃月はかりける
寛祐法師　忠節乃子

あまさかるよしれみかきれ旅人の
もちしとらのをかりもすなや

ゑハするとし
むすれ糸のさまた
簾の編糸代路石に
え扮て我すきこゝを心
みけるしすける心を
好色心背簾の孫に
しるされのすけるゆゑ
是ハ男の好色心をミて
嫉妬する女の异なる
いしかるつもりとふ
事いそね日ハなし
われならやえぬ人露るな
こしやのや助字也止
菜ハ病をいやとせし
玉江ここもかわ舟

題志らす　　よみ人志らす

玉すれ糸乃さまたに人をみて
すくるこころハおもひかけてき

しるされ乃すける心とみてより
はしてふことりけね日ハなし

われならやえぬ人ふるやすひすれ
あふ日なくてハやむらさりの

玉江こくこもかり舟乃さしハへて
なみまもあらハよらんとそおもふ

みるめかるあまとハなしにきみこふる

---

玉江銭おとしこも刈
舟乃帆の帆まてさき
よるとくよき帆お
らふさりハて志み立
よんとこし
かんるめかる塩とハ
海松和布かる蜑る
られしも世ひ手袖の
ぬるとし
ころやみて漏れ流れ果
音薬お云浜木綿え
芭蕉に似る葉乃
茎の皮の蔵してお
かりきぬるもにいし（もえし）
熊野ハ伊勢とと畳

わかころもてのかわくときなき

柿本人丸

みなおちらし風雨ゆふへある
ころハおもへとしるしかねつも

はるゆき

あさなくけつまハつとるおちや婆の
みされくそのをおりふへころゝそ（魚肉おりいをくる也）
けさうし侍る女のさしよ

かつらと志舟さりなれハ

藤原實守朝臣

み隠しとしもわかぬ
無頼きことなり
ゆきかゝりけれハつまる
席者なりし風情を
わりなきハ棚井の清る
ぬる井ハ棚井界あり
流しつゝかなやんと云る
の濁をなき濯すま
くせやるをとこなり
あらはせするなれ
さやんかあはハ清
く成かや女んとも
かきやハいまわかる
濯きいなるハ後世ハ
せしの心をきこゆ

わくらめとまろねのみはしるぬるなれと
あきのかきやんさてハすむやと

よみ人しらす

かへし

かきやりハふかきこそせなはさき風乃
こひそしられかすみせくもあん

さいしつると

ひとしれぬ心乃うちをみせたらは
いまてはつらき人ハあらしな

女乃もとにつかはしける

小野宮太政大臣

---

ひとしれぬ心の中をと
此つきハおもひのか
とゝを見せまほしき
人しれぬおもひハ
人にしらせねハ思ひ
の年へしもひさし
となり
ひとしれぬなみたに
濡しさをほしつま
む唐衣袂ゆくなり
そもいへるを
同し袖の朽されを
我か身の焼しさハ
はりつゝまんとも
ましくて袖ハかわくや

人しれぬおもひ年をへぬれと
われのみしるハかひなかりけり
とみるみれとよはゆうつる

よみ人しらす

ひとしれぬなみたに袖ハくちぬらん
あふよもあらはほしてはみまん

かへし

きみハたゝ袖はかりをやくたすらん
われハ身をもなかすこそあれ

さいしらす

袖ハくちりくらねとよみ
なとりやさわき末ハ
男ともかゆるよ袖ハわ
らちもなく人ハ浅ましき
人忘れとかつるなみさへ
尽してゞ清原元輔と
号してよし忠臣ハ流す
となへすすて
こひとい六かしき条
忘とはふみあれハ何ヒ
おちるとこりん我忘
ハさるるを知せまきし
あふよの経てかくハ
此哥百人一首ニてハ
逢不逢恋と古今の
読し此集の趣意え
末の逢恋しおもとふ

人忘れをおつるなみたハはのくなれ
あふさと見しくも袖をしほりぬる
こひとハ恋しおもとふさひぬるわ
いつそわか身をひとり忘しせん

天暦御時哥合

中納言朝忠

あふことのたえてしなくハ中〳〵に
人をも身をもうらみさらまし

題しらす　兼盛

忍ふるとハりくるなみたすみなりとも
こん月もおそしとやする

よみ人しらす

事を恋路の本意と
こすれとはさらなり
雅なる人の懐に
れね身を使ふと云て
うきよなれハ逢を
いふ経て書くハ
中〳〵かくらきたり又
何しとし東野州云
世の中に経て様のな
くわせハ考た恋ハとこ之

あふまても月日をくりて中川の時そ
名ふゆしすゑなりあわれなきるふ
忍ふまてを川とはしれし見るはん
こきたれ山乃中川の名しき

れ同云さ中くとりかす只ハいそぬきし鈔ある三ハ一向難題せし
何すゝやうさぬまわ逢すハ人とうけてもこん月とハゆくさ
きれ月も陳たも何る現し今逢ねのもかくすまり月とやと歎く也
あふまでを月日まうて名ふなやく逢初のうちまよ哀れとおもふと
何かとをうつとも　忍ハ川なりんとうらんする時をおもわり　訪居

くる苦しきこしそれを君かはんとあさいの山乃松とこけるけり

いのちをハはかりかたふ
命を惜まするゆゑよ
やゆかへきを我も
おりて恋死ておれで
死ぬるさかりなる
らんとし
ゆくすゑはかりて
ゆくすゑハ逢わんと考へも
あらてもの寿ののち
て後に逢ての年
月あまり侍ぬとさ
いまされハ恋しつるよの
せて侍れハ恋するる
り苦しきを逢せり

むくく狂死りさ
らんよ恋しとと
こひ死なんのちハはせん
いける日のうちのさめ
よこそ逢まほしけれ
恋死なん後の情え
けせんとし（万葉哥）
あれとも君をふいて
恋もひく死なん
命も君かたに於を
いとおしみすされ
と恋も君か事にて
やおんとかくやわ
ひとれとえ心を
恋をやまさせて

いのちをハはかりかつのまへしと
わすれやとめにほしねしません
はるゆき

ゆくすゑハはかりぬよときつるまの
二月あまりかわひかくる
読人しらす

いまされハ恋しまるもすりのまきを
あかいのちをハはかりかつへん
大伴百世（大宰少弐）

こひしなんのちハなにせんいける日乃
ためこそひとのみまくほしけれ
源経基（四品貞純親王子　上野介　五位）

あそれともきみさまかくて恋きひて
きえんいのちもおしからくよ
けさうし侍りける女の家のまへを
わたるとていひいれ侍りける
よみ人しらす

ひとしれとおもふ心をとゝめつゝ
いつとひきみかやとをゝるらん

いとひらけ門おと
きわんましさそし
志られ乃はふておそ
そのかるいかれ
えんし心い明し
はゆきわするのめし
露わてしれめ結まて
しるのかひあそさ
ゆけい涙そて然え
りつのむちすると
きし兵は露の證
露えそりるのむるす
いおもひときこんを
露の證し心い明し

題しらす
志られしもあめしつかにて君こふる
こし乃かるりを袖はぬれつゝ
ちまかなること（さゝの）あはれなる女
よはなりける　菅原輔昭（三位文時子）
はゆきもわするゝのめの色ゆけを
きこれいかわ乃心ちこそすれ
かへし　よみ人しらす
露きえりるのむすこともなき袖を
あや〳〵やあすのおもひきさらん

---

おもひやきらんとは
ゆめをさやうかに
よそのひとをまもりとそ
あつれてともむすふあいは
ちかれてはの書のすと
山川は立つき流ると
いつん枕はそえらすれて
乃證しの書て契結せ
むすかはりく立つき時
よわるわきるれと
あつく涙こぼれそして
はひとては死ませぬ
志はせぬは死せさるも
只おりんとしてむすふさ
へ底のかわるさちすれは

たいしらす
おもれくとしのむすふちかいはやま川乃
こひしきせうりわすりやをせぬ
かはらくはしまはせね身とそ成ぬへき
このむすふたのみるいのちそ
いつそとおもふこゝろ乃ある時そ
おもはくさへうまつりかえる
わいつてとまのふいかはすそつてき
なみやわか身れつきりあるらん
人まろ

寝よあひてくそ
まるね男とこ乃んと
ひそさしやりの宿の
はかまをそておやけれ
こ知りの時ハ身の人のまる
かおかまそてまするれ
まあれしくも焼き
とやめちかはてまか
るるかに疵れ腹し
わかつくもまの中汁ハ
きのまも恋なれてお

こひはてをしるものハうてし川霞千れ
ねまれなるいをいゝくるさん
恋つてこそしるをかまさんむつけ
おけんけうさをいそくるれん
よみひとしらすと
まちをのしかしいかけこれさ者
かけよりごとりこいね月のきし

やりと永絶てもそるうさるかハことりやうまりさんと
恋つてもそハそれはおる寄よ申やし何すハ恋死さんと切なる宮
恋つてとそハおりさん心向おむくけハおそんの枕絵し
きこしそのこかりひみけこみけこハ医の粉しおけらごとは出る下

そるれうり切る
あさまるを芽まり
うそしまをとはけて
は我身をはかりく
人乃痛さを知りま
きくなのうさハ身をと
つそし知つまりんと
忍知人ハまさと綴
あさまのゝ立田の山
證文書るもまき
又あさまの立とこき
つらくるれ枕絵
まきのの千まつの帝

# 拾遺和歌集巻第十二

## 恋二

題しらす　よみ人しらす
たるみてよおもへるあさまれ侍きハ
男をはゆるくまよ人乃志てぬよ
あさまのゝこころ乃山れ善はら
又くるひとも見てねところう
人まろ
あさまれ千ころ乃帝とハさか付る
いさまる人をうるよしもなし

辰市大和之市ハさえ
うき栖しあさき名ハ
立さはけともさやさえ
人をまさしゆにせぬを
としゆるを覚ゆう
へく市乃縁し
あさき事をいはれ乃池の
盤余（いはれ）池大和之浮蓴（ぬなは）ハ
ゑ葉に葛されハなると
いはん枕詞しあさきるを
いひ立まて秋くえし
竹乃葉に垂たる露
まろひ合て寝るとを
あれといはん序寄し
あちきなや我名ハ

よみひとしらす
あさき事をいはれ乃池のうきぬなは
くるしきものと世にこそありけれ

ひとまろ
竹乃葉におきゐる露乃まろひ合て
ぬるとはなしにたつわかなかな

読人不知
あちきなやわか名ハたちてかり衣
身にもならさてやみぬへきかな
かり衣我ハかりるもみれなくは

名のたちて肌もふ
れすやまんハあちき
なしといひて尋ね
も別して時衣越
かり衣我ハかりまの
我にハ力をかれる
まれねよ無君
ふつと云衣うつ力
乃縁語し
深河のよ宿るは
深河縁あこ有を
よせされハその上句之
こころ沼にこえ述し
支隣ハ山城宇治郡
やこは讃へといはん

まれにのみあさき名そたちにける

源重之
うれ川にやとる波乃をやみれを
あさき名ろとこそいはまほしけれ

よみ人しらす
こそうのあそ誰かいひけむ深草乃
あさき名すくんさきつせもなし
安乃ことはしりける

藤原忠房朝臣
君か名の川にとかあさき身歳廿六

枕詞し侍人乃詞を
歌よりて見しハ詠みぬ
その詞ハ無名なる
らすらんやなと思ひし
思ひの名れさうほどの寝き
かたよう人のなけれ
されるる人を見君の名
の事を我ものことをしらね
見ちハくよふかも
見すハ手も我も我思ひき
我身の事をれハ絶
ますする勤それとき
君乃上にも我人身
よつてみよし
ゆめにても見せ[illegible]

かかようひとりありて見やしや
さいきつとも　よみ人しらず
ゆめりとも止やす事へそれとねやハせし
あまりこころわすれしききを
夢よゆめ逢つきし人をあひ見する
さめて乃のちハなほしかりけり

権中納言敦忠
あひみてのほ乃心にくらふれを
むかしハものをおもハさりけり

坂上これのり

---

見し人とねくこそ思ひ
られもわての夢ささも
見えハれとねやハせし
ねもせて見ねハほうやさ
夢よゆめ逢つきし人を
あひ見ての後ハ夢
いひてもあひし夢よ
逢つきし人をあひ見する
見てくのち待ちきて
あひ見てのほれ心
云首云見ハ逢見ての
相逢つされたるよむりてはひと思ひしハその思そもたのし
さし我待せ思ハやもときやよきそし待ちも心のたきこと
かいさくハらくさむやとうち逢見ハ無きんとおもひしを我の名
逢見てでもらる　逢見てもとくもかれハあまつよとまてのちそれ
逢つき人のあられねくせハ思ひあまりと逢てハ逢つきさまんと

かいさくハらくさむやとうちいひしを（とけれうけ）
あまりもとすこいしうかれ
よみ人しらず
逢みんとぞを待のみ待とこの夢よ
あひ見ても人乃こひしのまさん
我こひをあをあひくもちてきます
いやまさりあるこころのみして

皆人ハ又あまりうけくゑにきさるをよめるも
我並ともあをおひえくも心明しおひたくのちれぬなりそ遣ハり
御てる心あり
あふことをまつ月日
後朝くゆきこん暮を
待わかる心しるしお逢
事を待つ月日の久し
さらわなふ一日の暮を
まつるが久しきさし
行つきれあつりまつハ
白露ハおきそいと人
枕ぬし暁の別ひそ
おきそわかるるなり
さわるように詠
あひみくも猶逢ね
いくみ説くマハ明し

こしめて　女乃ちとまりてあらさ
につつつなる　よのふ
あふことをまつ月日おくれしにし
なふ乃それなりいさしらなれ
誹諧　はつゆき
行つきの　あつりまつハいてはゆれ
おもきく　わひしきまされせまりや
あひみてくも猶てさまね心なる
いくちねくうこひ乃さむへさき

---

むまたまのこよひハ
烏羽玉ハ夜の枕詞
也鶏ゆくハと鶏なり
ゆくしるこんりの待
暮まふさへし暮詞
けらし
ひとりね時雨これ
明く
かつらきや我やハくめ
くめ乃橋ゆとハ葛（カツラ）
城の神をいとしむし
役（エンノ）行者吉野葛城
乃峯に岩橋
とわたさしむるり
この神形ちみにくき

いとまなる
むまたま乃こよひあけゆけえ（まいよきさい）
待さゆくきみをまち暮しけり
よみ人志らず
ひとりね乃時雨されしとわかれねを
まれりあふ暮てわひしかりかる
かつらきや我やハくめ乃橋はしの
行けゆく別し物をこそ思へ（時平公号本院　不安なくし）
本院乃みれ君のうらみなるか
てまわくもはさみ

とかく昼ハ役（手）
せさよるのミ詣んと
かけハ役行者（ゑんの）
まて呪縛（じゆばく）せらる
也山鬼の心ハ我とて
こゑの橋つくりかね
ありねとも只我
昼をさけてかの
こと影を恥る心
あさましさを我が
夜まで乃手るところ
て説得て書ハ伊州
と房君代々も云
はきさいのあるなと

平行時

はるさめしなき露ふきつる夜よの
ひるまそりかりこひしきやなう
本院乃ひうしのさいの君より（時平公乃むすめなりや）
まうかよひくはしくなりけり
大納言まさのぶ（清和陽成院の子）
かて何なき心と君をたのみつるへと
みれはもなくこひしきやなう
返しもと　よみ人しらで
いつしかと言をまちたる代の大空え

---

かて何なき心ハ君よ
只一ツなる空とけさ君
まてさめて帰りの翁子
くらふ無くさ空の我
又待るハのみるかる之
いつの言をまちつめ
書てハゆへと書を
指改文代用ゐも書
ゑ何ゐるの様々と
日のうちより二さひ
心明し
とくあさそねかく暁
古今に暁の暁のねさき
百ねさきとなるを本
歌にて百ねへ給を

くるるさへこのうちとけつかれ
女乃もとよりまかりかへりて
大江嘉基
日乃うちにうちねをふしてひはまちぬる
とくあけねとそおもひつるかな
返しもと　すけゆき
こひそめしまねく暁も我ごとく
なさけのまさねばかりなし
よみひとしらで
うつゝも夢も人まよりはのへい

ときちゝく昼ハ夜をせさとよるの棲んぞかけハ役行者の呪縛せらるゝ也此歌の心ハ我をこひ乃橋つくりの神なれども只夜るをまちけしきなく昼ハ別を惜む也あさましきこと我なれ乃千るゝとえへて古緑て書ハ中けると侍る〳〵代乃かたちもなきさいふなるにそと

平兼時

ほさやしなきこ露ふきつる秋風の
ひるまそれのかりこそひしきやなかり

本院乃ひりしのさいの君より（時平公乃むすめなりや）

まちかねひくほしくより

大納言まかけ（清蔭 陽成院皇子）

みつかなき心を君にまきつるを
みれはなくこひしきやなかり

題しらす　よみ人しらす

〳〵川ゝりと書をかつかみ代ゝ夜見え

---

みつかなき心ハ先ゝ月ゝ此一ツ侍る空とけさ君まとろめて侍よの籠子くちなき空の我れ又侍るハいつハもるまとい乃書をまちの書てハゆんと書を結始文氏思ゝも書子何ゝるの勝さとこ日のうらゝ我とこさひ心明し
とてはきえなく晴古今に晴の晴の我ゝき百我ゝきと侍るゝと本哥ゝて百我の秘を

くるまでハうらみしりけれ
女乃こゝろまつかなしく

大江為基

日乃うちにわすれなからもひとすする
ところあけれなとなくく書ゝると

題しらす　よみ人しらす

ことそのきさえねなく晴も我ことく
ゆきさわひしきさ我いかなるし

よみひとしらすと

うつゝも書まも人をよらるはなへハ

かくよゐ後朝の別
乃後ハ猶なほさら
しとぞ
うつゝの夢見しをも今
君ハしかもゆきも
あかつき別の名をと
笑て主人とするより
暁の別の名ぞなく
とし
君とみる月乃影
いやねあれハいね
ハせられね月の影
るとらへかけて
ねられぬよあり
かくそもあるま悲

それゆへそうかうれしきさいはし
あかつき乃わかれの名をとりとそ
それゆへそらハまつのよし
君とみる子みにこゝろみよハ
こゝろとけさるいやはねしく
世りよのひとつめくさける
こと待わくさえようていい
はかり侍る　在原業平朝臣
かくしもあらまし　物を白雪乃
ひとひもまさはすさるわかこひ

白雪の八一日もしれたと
いえん雅領を言ふらく
朝夕は何かとしまし
物を今ハ一日も何かて
これは無情るところ
あさこぶりとするまも
朝夕ハさてる中もなき
とかくさてさかなる
いぬまで心ハ明く
男をつかハし露をおと
暁起る此のさを待る
うと揩に物のかの
うしとおもりいつこ
を思ひて無きと
よろこほくしやうし

女につかはりけるうたのふ
あさてかりとするまもなき君によか
あかくうらるる袖なるらん
よみ人志らす
男をはめに露をおのれとなふらる
ねりつきこゝろそへてなくらん
うしとおもふ物のうへん乃無きさえ
いつことふのこゝろあるらん
よろけそも何とて物を花すゝき
それのりくるひとつハ無さ

又ねはゆきハよそにて
もおりしにおのつから
あひみてねハこそさ
さきし花はおのつから
まくらん枕ぞし
ゆめもうつゝもまさき物ハ此
みけるハ陽焔とて
ま天よ高ふ見ゆる物
しかる所のものとゆる
其月とよくも花し
おのゝにえし侍
ハ夢わたはのすれ
かるとも
ゆめのことも知ょる
しもハ此字ニ書と

ゆめわもしりぬる物つけゝるふ乃
おのうりえそしけふかとみる

天暦御時歌合

忠見

ゆめ乃ことなとかよるしも君をみん
くるゝ待間もさためなき世を

出てさうふ

こひしきをはなにゝつけてなくさめん
夢またに見えてもねるよなけれハ
女乃ことよりくてきゝかうて

---

待ちても志られね命の
うちに夢も逢まうく
しかるも此夢の如
くおのおほるのとん
逢見てハなをさとし
こひしきをはふみての
物をひよまうとひ敢
もなけまハ家にも
見をとゝくも侍り
ねハ難めんの事と也
あけぬれ乃うちふるう
好事さつゆりぬ事く
よ侍らんとすれとぬ
等花京西ましと
まわとのさ花は

はかりける

あけぬれ乃うちに我身ハひねる
おもふこゝろのゆかぬ悲しく

源公忠朝臣 日ころすまひ侍（此のうつれハ男色の事かや）
ひ侍るをいひける男のもとへ
をんなのいひ侍りける日つる
かける

書く

まちかとの乃ことをなにこそ人は
あさとまさしれも見えねハなき

頭出して よむ人出して

人はまれにて遊くは
ゆくに我はうてはの
まもられは三まつさと
あふ三乃おもふおもひは
おもはする三されとも
志のれと人なれて
人は知らん人の悟きをも
志のひはく思へは
住江の浜に松根の流
なるをとりて書をみ
をまた若しきに神
なり祝れたやさし
こひあまりての
忠房おほ須太郎流
にも娘と家の家まで

男子ゟ三乃あまりのいはのゝまても
人乃志るしんこそ乃わひしき
志のひはくおもへはそ〳〵住乃江の
松乃ねなのくらくされおもや

忠房乃むすめ乃ことよひさ
しくまうてはつりつる

大納言清蔭（陽成院皇子延長三賜源姓）

すみよし乃松なくねともしくしも
きえとねぬれおもふなるらん

みつ

---

住吉乃松あまねく
住吉乃松は久しき物
也若松あまねし君
こねぬよれ久しきと
いさしくも思ひしね
流れて久しくも流れ
ねまもあるき住吉の松
乃宮の住吉の神
らん今之條候し之
なかせんよむすむかん
岩代の松お消代人
と録は久しき神と知
あまり岩神さと
かき屋乃松代浮ね
片岸乃松のはうき

いさしくもおもひしれぬる住よしの
松やまつてふいはひのもとへん

ある男乃松をむすひて流れて
よみ侍れは　よみ人志らすて

なかせんよむすひむすはん岩代乃
松そひさしき神とまるく

返しとて

かきまし乃松のうきれて思ひしは
されともよ流れまてゆくそれなかり

人まろ

寝乃枕邊人なき時
結て思ひしハ如藥つ
かに成りしと岩乃
松根の波をそ濡し
はひこそハいく久し
幾久しきのへきて空
はかれて年月へし
こゝろしくをさ逢
年をへて待むしくて
さひしくてハ心をさを
流れそし定雖逢中
も月日へし志まよ
逢を恨の思なり
すぎ枝りそりける
二三の句ハおはさる所

はひこそでハいくひさしうもはつねとし
よう月乃ごとおかゆるの那
年んとてもおもひくて逢ぬれそ
月日のみこそうつりかはれ
すぎ枝あてみけるいさよみおなさるハ
いふせんとのわがねやめらん
よみ人志らず
こねかねて志りてん人まなをせん
はるくかありまみねかさまふ
秋霧乃それねおもき乃娘ねと

枕邊ミしまけく
をはそさらん中をかつ
そいろせんとて逢
見つうく
こゑかりて志りハ今
そうめ秋々てはで
逢ゆし夜のねさめ
むなひは志りハゆのそ
今は逢ひかたしせんそ

見るまのこひくとも見てね君ゆゑ
こひわひねねをさまなのん起きて
いつとなくしんをとすの乃さと
思ひくけさうし待くる女のそと
よ流りくる　をとすけ
をと乃川とう流れまなかれ出る
いつく梅の山人乃みさそ

秋霧乃それねねの
霧晴ねえのそれぞ
まえしくえてこ無君ハくえてね君と云ハ一旦のはふれねと
こひわひねねそぶ　逢ちひねてハ思ひなかて云ふ也逢もそかねと
本まくもそうなきこの里を我ゆく所のなかれなきて是ならぬ人也
をとす乃川よう　青柳川　青柳里と唱へく　紀伊と思ひ錦る也

風さむみこゑよわりゆく
秋のすゑにて声よわり
ゆく虫のねまさりけ
なくこゑのあはれよりも
（いはで物おもふ）といふは物
思ふ我ぞまさるなるとし
虫の啼ゆれ泪よ
序なし漢文ハ盛
泪ともなげのさります
也さ声ハ執着の心
恋をするハくるしき
物也し
思ひやもきみ思ひとハ
知つてんぶふつきあとし
夜也　九月の作也

こゝろをも　まちいと思ふとも
風さむみこゑよわりゆく虫よりも
いはでものおもふわれぞまされる
虫乃ねのあはれはきゝにくゝもせずいはひの
かのまへにいはをみするようもなき
恋をするハくるしき物と思ひつく
人をわが身に思ひくらべてや
思ひやりきみ思ひをハうけはれん
まづかくそうかはりふところを
けさうし侍る女乃九月夜也

---

此月海尽日にあてられハ空
差別（ワカ）さ拾遊もあり
こゝ物よさひさゆへて
ゆゑて執斗云言よ
すこし出ててこゝも
しらずと女の云恨を
あすまでわかる
此世のうらすまれ世よ
ても思ひやりさひ侍
すまでねあかりとも
死てはのさけも恨
なれんらし
狩ふてもきけハ思ひ
無此の声ハこゝえひも
やむなれ思ひもたいた
なかてハゝそれ侍んとも

乃月ありそれハ紫（ジガ）ひあく〳〵ひ
さゆへて執思ひ侍るまゝ声てさき命
なあわよそれハ思ひくらわひ
てのちよ侍りとひ侍
それハ　よのよ
あすまでねわが身あわとも恨しきりん
この世まくの丹やましと物まへハ
観声つもて　人なる
狩すてきゝ思ハいとも思ひえを
いかにも声ゆくら我こゝひさん

万葉集和し侍りけるに
順万葉集をわしたるは
此中の哥の道を意を隠し
我等か云万葉の哥を
本歌として詠返し
侍りしかは其の中をしらねは
万葉云我書のうちに
我人恋歌ねて無
御かへし無覚えんとは
はせんかたも難面きめに
も人は思ふわれ
ぬらん我のうちを
いかに無覚ねとまれと
其心の中をしらねは
さいはひしと思ふ心

万葉集和し侍りけるに　源順

おもはん心のうちをしらねはや（我等か云へ）
志ねもわりなくものしとやらふ

（謙徳公のわかき時）
侍従なり侍る時村上乃先帝の
御めのとにかよひ侍るは（謙徳公の事也）
きさきまちにしのひて文またかへ
すけれは　一条摂政

かくれぬ乃そこの心ぞうらめしき
いかにせよとてつれなかるらん

---

かくれぬのうちの心
深る沼とはうちの心
といえん枕詞也我
はかなきやうをくく
難面き心底のうら（ツレナキ）
めしきよとく

我恋のくちをしもとし
我思ふ心をしも思ひ（こゝろ）
ゆるす我をは思ふ人を
人を無事に難歎し
草かれの水乃
草隠れ乃人を草陰
に難き隠れ（カクル）（かわかず）もしぬに
時は思ひ難ぶ
わかおもふ人は草葉の

題しらす　よみ人しらす

我恋のしるしとりてつらき心かな
おもはぬ人をおもふこひしき
かくて物思ひ侍る人は

もとすけ

草かくれかれにし水はぬるくとも
むすひし袖はいまもかわかす

たいしらす　読人しらす

わかおもふ人は草葉の露なれや
かくれは袖のまつそほつらん（イ ぬるらん）

かくれなハうけて其ハ
みしく其ハよの空
うちハねうきし心唄
さゝとちおる涙
心唄し
衣をやねまてや
我流き涙ハ?柔
見せやうもきて衣
をねまそやんと
人めをもはゞかる種
人目よさける秋まの
涙の流き空し合せ
さハすハ自由かく
けまハ袖の涙を
かくハあるかきさた

さゝとちおつるなみさハらちのみ
こらえもかねとうけふへりける
衣をやねまくやうし流の子
（こらみるかみ年）叶まくりとも人乃見るへく
思ひつゝ物思ひ侍る人乃人を
き下に侍れハ　実方朝臣
人めをもはゞまぬ物とおもひせハ（しのふやくし）
袖乃みさ乃かわらましやハ
題しらす　大伴方丸
早乃身ハるゝも篇よさけりめや

---

いそのかミふるもし心ゑ
ろ上ハ今もさとこえ
なにハも心ハ唄し
わびぬれハ今はた
此歌ハ撰集ニ附出云車
出まてハ今家柄の後
良下ようつりくるとき
素首云ハ宮多後乃
後時彼後良下時平公よ
思ひて通ひるる難れ
てなよつかつても意
しわひぬれ今はたまハ方
とひはかりて切まる空
今ハおかまもまつりハ切なのハ名をよろうあれ男をつりてもおりんと
切りてそう身をつらうハ難波の縁と彼帰よ並部るもと云たは撰集
いうもかいぬ涙の　なか月をいうつおりんともさハれとも難るき中う

おもんといひてそのあと
　さまよの手と
わびぬれハ今はたおなじあなたなる
男をはなくもはりんとおもふ
なか月なか月ある女のもとまつ
りける　よみ人しらず
いうもおまへねさいはのあやめ草よ
て浮くとねこうあつされ

たねとらくさといひけて
や葛の根と言ふに係ち
わすれても紛らはすさめね
袖ほ物云あやめ草と寫
乃そねハ紛すさめす
といふ世俗の語ニ不許
容とするといふと云
にハ許容すへとすなむ
と云し愚案上句ハ屑
弁しかりあめも多子
人の来ぬハ待やと
かやり火ハ猶子の
下まさひこゝるす
をしすましゆへんと云
このかれハなしけり

題しらす　千ほね

わすれてもこゝろもすさめぬあやめ草
かゝらん人乃来ぬハわひしき

かやり火を見て侍く

よのふ

かやり火ハ杉やりゆへ人乃こゝろかな
夜乃まもとうしてすをゆん

題しらす　勝観法師（玉忠卿下子）

このすまハこゝろのかたちこのすさき
秋乃さかりさかりや志るまし

---

このすゝきハ物によそ
ぬるとなし篠竹の秋
乃風よ吹なるとハ種に
別るゝし出ハ吾子なれハ
若きまよ種より離れ
ていひ出やせんとも
おもひきや我待人ハ
我待人ハよそよそて
あまの川をうらやみ
えんとハうらみし物を
とし　三躰詩ニ臥看牽
牛織女星と有るに同じ

よみ人しらす

おもひきやわか待人ハよそなから
たなはたつめのあふをみんとは

ひさかたやよそにみるさへひとりの
まちわたりすんあまの川なみ
わひぬれはゆゝしき七夕も
うらやまれぬるものにぞありける

たなはたやよそにみるへき　彦星乃天河を立ならしゆく夜の君
さて我ハおもふ人ニ逢事をよろこひて年へて逢ぬ歌なり
わひぬれハてふつゆしさ　よみ人よおもふね恋路によりて悦するゆへ

されはおほくは思ひしき通し年に一度あふ七夕を常は緑宵の中ニ入
いまくしかりもなまめあふて後をそへは一夜よあふ事やはきなし
露よるふあつの面つの　露けさもおなしよしへは秋の露り　荏イ
秋のよの露へより　これとおきぬる人をまねし
色わかれにも我さ　いはさくはとへまひもはなれまと
思ひもみえし秋の
露すら結ひく露　やへむくらしけれとさそりてく
からへ業するわれ
のきぬさりやくへし　秋はなほ心乃はゆりあくねれはと
いはさくまとよ言ま　とのはひのしきこゐまはぬる
此かすかにおくも
とよ人はとよすくと
結ひるよわかとの同へき人をとよりたかこへ問はすなとそし
秋はわか花露よ心の露は涸るゝも秋は露なくとえとも我か
心乃露よはあるれもさしとよ人をとりて秋の歌のしき心を読り

何あしひきの山よ風も
独人のつる也まれ
らて山風さむく独
ねの夜もさむさに
ひとりすまはれ
をこねむことをわか
あしひきの山鳥の尾
ことは万葉ニ乱尾
と云山鳥の尾のなき
を云し序哥にして
なかきし夜を独ね
んと云は独ねの情
態わかり様よ　
つきけり又其上の哥も
童蒙抄ニ山鳥ハ昼

# 拾遺和歌集巻第十三

## 恋三

題しらす　　よみ人しらす

あしひきの山した風もさむけくに
こよひもまたやわかひとりねん

人まろ

あしひきの山鳥の尾のしたり尾の
なかなかし夜をひとりかもねん

よみひとしらす

あしひきのかつらき山にゐる雲の

ハ雖誰一字にて叙ハ
別にあらわれ穂にも
わくらはにもてまさ
とゝ云言葉ゆ數字ハ
ことハふら用ゆるや
落ひまの山まてかすまぬ
序哥にして心明し
何ひまれ山のこすけ
山すけハ麦門冬也上き
まとふなとさらさん
序哥にして心明し
おひまれ山こえて見て
山路を言て松著
せハ恋ての言のわかす
云ていかんと心安し

よろしくもわくらも君をこゝらへ
何ひまれ山乃山すけやますのみ
こゑねたこひしき君もあるかな
よひ乃おもひそのみてはるすなと
石上乙麿　左大臣麿男

おひまれ山こえくやとおもへも
はるちよ絶くいねさしんかも
篭志つゝと
人まろ

足引乃やまより出る月まつと
ひとにハいひて君をこそまて

---

足引乃やまより出る
心明し
三日月のさやかにみえぬを
序哥にしさやかにみえて
すみたるをみれまれ見え
まれなきとひけて
此ハ君か人のうへまれ
しまふ心とソり
あふことハかたわれ月
はみうらうしとそひ
みえてされハあさき
らすむきもしあれ
うけハ大かたと云也
秋のよの月かも君ハ
こゝらハ見も恋しお

三日月乃さやかにみえす雲かくれ
みまくそほしきうたてこのころ
よみ人しらす

あふことハかたわれ月乃くもかくれ
おほろけにやハひとのこひしき
人まろ

秋のよの月かも君ハ雲かくれ
しはしもみねハこゝら恋しき

亭子院御時御屏風八月十五
夜月乃影池にうつれる家
よ

かきそへには侍し
あきのよは月見るとを
人めと思へ給の月
見るとのみおきゐて
こよひも又ねすらや
帰らんと
恋しさハ我ほとに
あらすとも中それハ
我月よて君を恋れ
と君ハさやかに見よき
しこよひの月をそめそ
見給ふらん君れ我と
同心ならハ涙くもりても
みくもる詞
さやかにハ見るへき月

なさし女のくけさうしける不（[illegible]）
平兼盛
あき乃よは月見るとのみおきゐつゝ
こよひもねてや我もかへらん
月あかゝりける夜女のもとに
はへりける　源さねあきら
恋しさはおなし心にあらすとも
こよひの月を君見さらめや
返し　中務
さやかにも見るへき月を我はたゝ
なみたにくもるおりそおほかる
題しらす　ひとまろ
ひさかたのあまてる月もかくれゆく
なにゝよそへてきみをしのはん
京よりおほふ人をくきてまかる
る雨ふりけるよ月のあの
かくれたる夜　よみ人しらす
みやこにて見しにかはらぬ月かけを
なくさめにくもあかすころかな
題しらす　はしゆき

同し心にはすむと
いふよこよひて我も
同しく君を見るとも
こんとて何を思ふる
おろかにきこえよめり
ひさかたのあまてる
月をなかなかにたとへてあり
らくて見るよ我も
かくれ月にたとへ物
必くちるまらう.
躰きそくよめる也
みやこにて見しよ
都にもしみ人とは
よ見し月とかはらぬ
せめてなくさむ心
なるよしや

てる月も影みえて
月もその影に似たる
物あるを我恋はさく
ひとしものなし
とゝ宮みやこなる里の
みやこなれはきえ
我をさそひやすらん我
みよさつ人おもふらん
よみつへし
月みれは我思ふとよめる
月よ我思ふとよそ
物やとし我をさは
ぬ人よりて哀といふ
それとさるくさふ
心よりよめるなるも

てる月も影みなそこにうつりけり
似たる物なき恋もするかな

月をとこくぬるある男をさそひ
出てつかはしける　中宮内侍なる　大和権守時明女

とほきみやこなる里の月をとこく
みやこそ（わす）れをおもひいつらん

題しらす　忠岑

月みれは我思ひいつる物のこそ
なりぬ人もはなれたるやみえん

万葉集にものせるうた

---

ひとりぬる宿には月
独ねて月を見かく
さむく恋のまさる也
此哥の万葉の本哥
鏡なす二ツあれの
こすゑまたは独ね
てらさすあかき
夕月夜かもますか鏡
秋よさ月の影は
恋ひやまて恋まさる
まされ独ねる宿の
隙より出る有明の
ゆかに影うつらん

ちるさの不

ひとりぬる宿には月の見えさらは
こひしきことのかすはまさらし

題しらす　ひとまろ

あの月乃さ明此月のまつとも
まそかゝみさやのきは我（こひ）恋めやも
月あかきよ人をまつらく

ごとあつくはやみすまうほしいはし秋の此
その月の明の
あかつき月のけ乃ひとさのめなる
廣哥しありくてこまりしまりては恋せんと
ことなしやさしき哥　如此結句とかうは無ひくそらへのさめなる

てらすはうやにはうそへ月のはのみすかくおほきうと

也人よりのみはわれうひらまさを

かくねよ心をさへて

同比は君をうき物と

のみおもひしよ君かうね

哥は物を入のかさに

此心をさへて見り

君をつくしともひおもふと

こゝろも不中まゝうては

春源 頌は歌を詳ま

へきに女くはしく

に今はおはしまさを

（人数有も悔うし）

ちうきさとも人をうらしと

人のつきさをおもひおもせは

三条院寛和二年七月十六日春宮

とはしもとも　春宮左近　小大君

かくねよ心をさへくおもはくの

君をはしとおもひけるかな

よみ人しらすとも

こゝろも不中まゝうてはうとのわきさ

おもねよとさへてそしつゝある

あまきさよも人をつらしとおもひつゝ

ねまくらはくるすのやまにくる

いまはとりしとひおもる女のもと

---

ちかきも頼ぬよかなとは

ひとくねをうきおもふ

みすまをうらみよめり

いまはとりしと　男の今

は我を忘と女の戯ひ

ていひけるなり

わすれなん今はとつと

女の歌は頼をそれく

おもひて我を忘ねう

ら君をうらむとをさ

よみしもはかれなれ

心得へし

むかしをよれての皇族

まの歌をえゆえてき

まてなひやうさ

わかせこうおもふも

よはりける

わすれなん今はとつとおもひつゝ

ぬる夜しもこそゆめにみえけれ

とかへしても

よるまてもいねまさかうわ人まれなる

ねさめのとひりおもろのまくら

むかしのいもかころのみこよひや

わかきさとこうらひきさそれん

わかせこのおもかけまてねる夜

なかつきさかみまつるさひしき

男乃出あへあさてく
ちかひてもきこぬ女の
独ねく娶く身を[illegible]
いつまても時異行の
夕まて独ねの暁く
人の寿さわの身一
逢かたき独ねを
若しハゆる時う
今ハかくの思ても
る物をの心を行乃
猶そ一夜ハかを逢
いつまん物すれ
異行の八衢の縁
まさしてふ
八十衢のちまたに
あらは

いつまてしとまさこれ行乃一よふ
伊る[illegible]とりみん
いつまんおもふやハ異行乃
よるハこひきみにあひみん
ひとまろ

まさしてふやそ乃ちまたに夕卦問（ユウケトウ）
うらまさにせよいもにあふへく
ゆふけとふうらにもよくありとこよひ
こさらんきみをいつかまつへき
夢をしるへにてかよひそすみる

---

ゐし夕卦問とハみな
辻占をきくことを云
のみきこそ八衢にて
夕卦をとふにもよし
をきたく婦に
逢やうに占（うら）へとも
ゆふけとふうらも
辻占にも吉凶
と夜ハ必来んとふ
ると夜まことすハ
いつかハ待えんとの意
夢をしるへにてを
かよふハ形見に明
うつゝは守ふまれし
夢の熟ハ寝るを云枕

あきてねるよれなくさめつゝせん
うつゝハすてゝうつゝ夢のよの
よるやゝしせす夢ありてらん
（廣幡中納言庶明女）
ひるまさへ乃みやこんねへ（附とうもとひ）
（あるはなくし）
問うとよりつさなるまり夢
（附めきませんしれのやまそてし）
まきんれハ乃やうつゝ問り
さつひまひつると人のいひ給
くるをきゝて
いまへをいへてさこのみおもふ
こよひ乃夢をまちあさきや

猶し野には道ゆくさ
それは花は見ゆとさ
へをそてうものと
咲めきしむらしとされ
しらぬらくさるはる
るは其花を見捨り
て春はあるらくさま
さそやとし
わすれ時あれは（カヘス）
心ゆくしきの田をは返
かへしのまつ侍
行つきさら春のわか田
ひやも人も見す
あつ無思ひき
かのいその菰刈わりを

## 延喜十五年院屏風哥

つらゆき

わすれ時あれは去の田へと
かへりくる人をこひしき
野辺つゝもよそひとせて

みつね

行つきさら春の河の田へとうるみし
おもひやみよし人の無きゝ

かのいそは菰かるおのこあまひとの
ねるやねかてのそてはけてかふ

そゑけくきやかをへうん屏きし鮮業物云ねるやかわうとは何とやかゝ
とゐねうし今かくるよ哥りよめんとおもひてとりかゝる縄のされ
いかれさるそをおちよおそゆえんをするよりけ哉中ねすひよむ
すきう待ことゝ
春されは柳の糸も
花枯よあくれる柳乃
春さむやすよろしを
とけよかめとはるかく
無くるかは結わくとも
柳の糸はとけされと我
いかしふおまるま久
定めあるき人心も雅の
言によわ定まるらんと
やゑをと霜こそ結し
おきとくのひり

よみひとしらす

春されと柳のいともとけにけり
むすほれたるわかこゝろの那し

いかにしてよるそこは見えんおもやまの
伊せのうめあさきひとのこゝろを

おきさとく乃ひりのはすゑ立かり
かくこそは見えめあはねさ乎ゆね

きよりひし乃山のあとりて春

此向ハ大和の龍田
こいろんとてしおもね
思わかれハ立あかく
やうにこゝろもめとし
あかめやる山ハ八にとく
心ハなし
我せこへときませの山
末播山近江志賀郡
ひとのむかはかりこう
山の名ハきませとえ
こそハさまさねと也
わかせこをなこしの山
奈良志山大和わか
背子をかへるとひ
宵子ハみえり心ハ明し

まてとせぬ人乃をとり
藤原（清正し）まさりてむすめ
あかめやる山べにしけく
おねはのあさ乃まさるまるらん
紀志つとそ　人丸

我せこをきませ乃山と人ハいへと
きみもきまさぬやまの名ならし
山部赤人

わかせこをなこしの山乃よふことり（ときす）
君よひかへせ夜乃ふけぬまに

---

こぬ人をまつちの山
待乳山紀伊こぬ人を
まつといひかけて郭公の
なくと同しやうにとゝ
志のゝめはあけさこそわかれ
我根ゆりふ深階同よ郭
公の鳴かくるわかれを
あてゝ思ひ鳴りの心
こくとて宵の鳴戸
人待宵は水鶏のなく
はやきつきて人をまつ
ぬ鳥をと歌くなし
夜永うときさなりうよ
ひとへなりしとかれとあ
ま近し人の心を落く

よみ人しらす

こぬ人をまつち乃山のほとゝきす
おなしこゝろにねこそなかるれ
志のゝめりあきさこそわかれ郭公
梅おりふやとへきてやなくらん
しくとて宵乃はゝとへとはれハ
ひともことゝふのくゐなゝりけり
夜永うときさなりうよみかさし
ひとへなりしも東ふかくれて
かゝるかことよのまさも此身なれハ

ゆかなと別れ家なるを
うちてゆるとの空のまそし
序のことろ事に疏れ
のる実れもあはれをねを
つひけれは業となすも
人々もはしも云並
す意するに
そらまれさきけて
各逃ね間のふ雅に
ある神のきりうちき
帰る人をとてめされ
しまゐらせ
人こそは夏のくさの
さうら人の口舌は志
々とよの君と携（スツサハ）了

はつねにもあへぬこひにもするかな

みなつきのつちさへさけて照日にも
わか袖ひめやいもにあはすして
人まろ

夏虫乃きりうきこえてみえしとかり
身もいたつらにあらんとやするへく
人こそは夏野の草のしけくとも
きみはわするゝことそわすれそ
よみ人しらす

野とも山ともしけりあひぬる夏なれと

---

それなとなりけらし
さゆもなりけると
野にも山にも志けりあひ
人乃つとさはしらん
ところの事をも也云
のそのもそをいはんと
てよる上るし
夏草は志けみに
まろこすけ荊三稜
也序言し心明し
山かつのかきほにおふる
古今にあるなて今
もえてし山賤の垣
須にせる大和撫子
是を本字とて意

人乃はらさへこのたえぬらし

夏草の志けみにおふるまろこすけ
まろかまろねよいくよへぬらん

天暦乃御時ひろはたのみやすん
所ひさしくまいらさりけれは文
つかはしける　御製

山かつのかきほにおふる（イさけ）なてしこに
おもひよそへぬときのまそなき

廉義公家の障子にゑかきて
こおむかる家に心あるけしきある

しとゞにぬるゝなき
此哥のこゝろハ
おもひしる人にみせばや
夜もすがら我床なつにお
きゐる露の間とよひ
知人にみせまほしさ
其床夏の露を
よせてよめるなし
秋の野の草むらも
心ハ明し
わがせこがきまさぬ
こよひの秋風の
身にしみて物思ひさ
もまさるハこひしき
ちりてよめるなるべし

を

清原元輔

おもひしる人にみせばや夜もすがら
わが床夏におきゐたる露

よみ人しらず

秋の野の草むらもわけぬわが袖の
露けくのみもなりまさるかな

三百六十首乃中より

（哥乃イ）

曽禰好忠

わがせこがきまさぬよひの秋風ハ
こぬ人よりもうらめしきかな

うらやまし朝日にあたる
露ハ日にあたれば消る
ものなれば我身もされ
さくやの露のやうなるを
日影の露のまゝにや
もときにうらやむ心
秋乃田のかり乃やどる
庵にもおけるしら露の消
へやすきを
すみよし此岸を田にほり
岸を田にほりて稲
まきて苗うへて
かるまでもあはぬ
かりそめなる
こひしき人をみせて我

題しらず　よみ人しらず

うらやましあさひにあたる白露を
わか身といはましものを

人まろ

秋乃田のかり乃よにをくる露の
けぬべくわれはおもほゆるかな
すみよし乃岸を田にほりまきし稲の
かるまでもあはぬきみかな

赤人

こひしくはかたみにせんと我宿に

かるを秋くるゝとも
こひしくハきてもみせん
かへとおもふ萩のさかり
に待わひくらすつく
こひわたる餘情ありや
秋もはてまて待を
萩の下葉かれうつろふを
みるく我の上まつし
かく人の心のうつろひやすき
ことはりと云和する歌也
しめゆもぬ野への秋萩さ
風ふくとやうくうら
みてものおもふ也
うつろふハ下葉ハかりと
人の心はうつろひて秋よ

ありしこし餘情なく
てあはれなるうた也
このうたも露の字を
あへてハ情なくし人の
ちきりしことの露を乱
しく比も情なく
枯かるゝハ人の心を
秋果るまてかくし
秋の果に露をかけし
名もなき事を入り
色はうつろふ物のまゝ
名もなき事を入り深
しかも猶にうつるとし
かゝるね身をうら

うへし秋なきさいはすさかりありと
（後撰作者 鮮子 朱雀院御息所）
中将乃きみも雨乃ふるよ萩よつ
けてつかはしける　廣平親王（天暦第一皇子 母祐姫元方女）
秋なき乃ちるさかりをみんすへとまく
ひとのこゝろをいかくきてまし
こいしきを　よみ人しらす
しめゆもぬ野へ乃秋なき風みけも
とみてかつ物をこそおもへ
中宮内侍る
うつろふはちるさ葉をちらさせとかくみえしよ

やうそも秋かりかはるゝるを
世乃ことゝり侍りける
よしのふ
このはも露かりハあへとかれなまし
さやかにきえつるきえしなまん
はゆき
名もなき里を入りすめしより
うつろふともわかおもひかくよ
よみ人しらす
かくまてぬ身をうら河乃瀬をよきよ

人乃惜まるゝ中も我
物すかれぬかれハ身を
うしと悟りて見すつると
也百歳の短代に矣な
と千くらひけてし
志すとくちするをも
人乃心の中れりけるを
志てらるゝいらわのか
もちぬんとおもふもす
乃そろうさそらの色
されと松の下紙をいる
ひて上せの紙まかせ
わかせこをわかこひぬれハ
丈乃まゐるへと無
つわかりとよめる歌

おほく乃月をもすてゝ侍るかな
志るさとちするをハ志りて松の木に
うへ乃こゝろをよみしなるかな

人まろ

万
わかせこをわかこひをれハわかやとの
くさ乃へおもひうらかれにけり

貞文か家乃歌合に

よみ人志らすも

霜乃うへにふる初雪乃あさこほり
とけすもものを思ふころかな

---

うつし海の景色も告け
まま冬ふりても新
常に心よくかられれ
ハ雅称をてよめる也
なまさく思ひかゝると
いを切なる心餘情さ
霜のうへにふる初雪の
雪の翁すかさし
序ある心明し
みよしのゝ雪にこもれる
山人ハ雲の隔なき
四道をえてし中務さ
る女のまとかれハなる
みとめくねをやなくらんとも
よのめつこ無程　さもめてたき

よしくとも峠ありかなりける
女乃とまりまちて雪乃山かな
待ちつれを

源景明

みよしのゝ雪にこもれるやま人を
かるみちとめくねをやなくらん

さい志つもを　ひとまろ

万
よのなかはことなき程成れハ
ましとおもふはまつりのまさ
わる

こゝろさしふかく思ひあひてもかひなきを思ひきるなれ
れいならす思ひもよらてなきてもまたまへくも見えぬ人なれ
ハあはて此さわかしく思ひてよみけるをかしくそ
いふせんに出しもちとよみ部立事しと見ゆいつれもあめのうちを語る
蜜陰乃こゝろもこれを本歌とすへきなし

---

あさねかみわれハけつらし
は鶏乃声に驚き
何りとくやさしき
こゝろなるへし
元輔かむこになりて
清少納言か女房実方
思ひよるへし
時乃まも心ハそらになる
今逢ひて時のまさへ
こゝろさへ心見えし也
しきにけりてみせし

# 拾遺和歌集巻第十四

## 恋四

題しらす　人麿

あさねかみわれハけつらしうつくしき（あさかみ）
人のたまくらふれてしものを

元輔かむこになりて侍りけるか
藤原実方朝臣

時のまもこゝろはそらになるものを
いかてすくしゝむかしなるらん

題不知　読人不知

むかしはいそのかみと云し
志らなみのうちよするわ
白波の打頻ての
枕詞也并は寄来く
する人のさすらす詠
みつて初見えしの
云傳ふとするなが
めて讀り冬くとそ
すかつ又そよひ来
らそいくそ独ねるう
をとのすゝや君と
ちりおもまかつ流
使ひいかりての之
いかりてかゐと書さん
小余綾（コユルキ）磯相模

志ろみ乃らゝ志まかはくらひさく
いそのひらわぬるとしのやまさ身
一條摂政（禁中ハ人めしのびて多く侍りしを）内よりまかくいびんなし里より
いそとひ待れハ人をもなきに
よく待待るすゝゆかてこさり
くれハ　　小弐命婦
いそのくゝみをくさんこゆるぎの
伊そきいてゝもかひなかりけり
（万葉集）題志らす　　ひとまろ
子そといひ来芦多小舟さえわなれ身

---

里に出りとのよる哉
見さ出しひろく来
まれねとし見て磯の
詠むへし
みすとふ此君が
序寄し心ハ山と
岩代の野中り
上るに序し昔もあ
さへあれハとてもこ之
結松ハ名高き子孝達
わかやとハそちわかまへ
ゆかし学での序と
波かわ見ゆるこ鳴
演樹伊勢物語あん
深床とる序歌也

わかなりふひとりおもねころうる
（万葉集）岩志ろ乃野中にたてる結ひ松
こゝろもとけすむかしおもへハ
よみ人志らす
わかやとハそちわかまつのひかしに
（万葉集）ゆかりしもてゞ人乃ゆらん
（万葉集）波まより見ゆるこしま浜ひさき
ひさしくなりぬきみにあはずて
人丸
（万葉集）ゆふかけにみちくるしほのちて鶴なく

ますかゞみまそかゞり
上るハ序とかる詞也
みる人のかほをうつす
よる夜ハ此歌の意
なるも是も序意
と自由の事也
まくてのちもと
いかほのやいかほのぬま
伊香保沼上野とい
ふの八野をいふ也
のやまのあしいかす
てこひしきとへ沼也
むかしよりかよす調布（テヅクリ）
はむかしハ武蔵にて
今ハ布とよぶくも

見れともあかすまははなれなき
（万葉）みる人のかほさへまねひてるすけ
何までのちもわすれんとぞおもふ
よみ人しらず

いかほのやいかほのぬまのいかにして
こひしき人をいまひとめみん

（万葉）玉河にさらすてつくりさら／＼に
むかしの人のこひしきやなぞ

男はまやくおもひみやこに成ぬるを
こひしき人のかりせさまし

藤原忠房朝臣

いそのかみふりにしこひのかみさびて
たゝるにわれハね（いぞねら）ぞかねつる

よみ人しらず

いかそうかるまきおもひつきさ乃
くめぢの橋のなか（イ中）みたえしかまし
まきかなくおもひわたしの橋柱
おもひまつりつ中やくちなん

いそん枕詞なさるす
てつかといふ中絶
昔の人れ戀ふる意
さハ何まうなと
男ハまやくおもの歌
ね攝しるの歌ハ古き
との思し今わかるさ
れ男れ無なかの中す
かりしぬらの後
いそのかみふりにし意
よするとハ神の祟
まうでくりてとる
めれてねさすりひかぬるくし古とこハ頭かられるの
いそうもうすさねろ中の頭ろの色（さふやれと忌嗜神古字にとる）
身かう一生ひかり宗八好ますのもく空ひかう中や頭んと頭くひと

世の中の自由ならぬ
人の哥なるへし
中くにいひなしてこそ
何とかくハいゝといひな
まゐらせてあまりみえり
ちけれハいはまほしき
ねさゝるやよそ人ハ
契りをうてみへうよ
と頼く哥也上るハの
ころ此哥を本歌
てこそおはれハ頼をえ
て我のこゝろのすゝむそ
よく頼りひゝとし
いそのかみふる社の
上る扇じかく頼をへ

て多くもさすとてまれも
難ねまかけての身
恋人とハ思ふかとて
我やうき人やつらきと
うらひようきみある
中の哥なるや
須者のまへ人神に
忘れと神かけての
ちかひも忘るゝを
きけハ哀れなりますと

---

女乃さゝはらいりくる

源兼光

中くにいひなをさせてまのなる
きみちの乃ちのうけさやまう

題しらす　読人しらす

ねさゝるやよそ人ハうらねくる
こゝろ乃ちかハりひるかわかり

いそのかみふるのやしろのゆふたすき
かけてのミやハこひんとおもひし

我やうき人やつらきとちはやふる
神てふ神にとひみてしかな

偽りのおほく人のみちかひても
わすれきのこゝろうさく

右近　少将季縄女

忘らるゝ身をハおもハすちかひて
ひとのいのちのおしくもあるかな

忘てし男をハ神かけてちかひす　此哥大和物語云男乃わすれしとよろ
乃ことをちかけてちかひけれとわすれける後にいひやりける
ほり貞女の二夫をかへしと神ふかの忘るゝいつそわかる
しるへきとその我身をも忘ハすて只人の誓ひの罰を
うけく命もうせんするを何める心哀深きと云者の性と

なにせんにいのちを
おもひ死をもしれず
とはゞ誓ひしうさ
いかやハゆかうやと
はかり生きをやを
うらくはわか心通
色言を始むる
ちりひちのかすにも
塵埃の地に積も
はらぬ我ゆへ高
くる迄信ん哀
なるのさしと塵泥
とよそてちかひぬるも
こひくてのちをいらん
かく思ひしらさむ心

女をうらみてさらにまうてこしと
ちかひてのちにつかはしける

実方朝臣

なにせんに命をかけてちかひけん
いかはやとおもふおりもありけり

題志らす　よみ人志らす

ちりひ（イヂ）ち乃かすにもあらぬ我ゆへに
おもひわふらんいもかかなしさ

人まろ

こひくてのちはあはんとなくさむる

こゝろハ恋死ん物なるをと
かくはかりこひしきものと
しらてのみかやうり
恋しんと志てハおそ
て行ん物をとしき覚
てのちわかりくやいま
さる心なるや
あすか川のよとみの
早き流ハ物を新にて
ふす闇なる所ハ新
うつれと切なる恋ハ
淵の如されハせめて我
見る人間にも流よとし
涙河おつるみなかみ
恋しとはゝ袖の上也

こゝろしなくはいのちあらめや

かくはかりこひしきものとしらませは
よそにみるへくありけるものを

よみ人志らす

あすか川のよとみにしあれなん
こひしき人乃かけやみゆると

貫之

涙河おつるみなかみはやけれは
せきそかねつる袖乃志からみ

万葉集和し侍る哥

袖にもせまほしきにと
内のかくしおもひも
忘れ川によみしを
内に流し去て忘れと
皆心に身もはなく
えわかるべきよしなれ
此歌の万葉の本歌は
万葉に云恋ヲ忘る川の
瀬にみちぬればをぞ
はてもなく我はなれり
ぬる やはり万葉を知
するもたゞ叶はん人ハ
けれハ狭衣まて本歌
問きもこそ我をへるとぞ
白妙の袖ひつまでよ

源したがふ

忘れ川とこれに川とおもひて
こひしき瀬もありなれこすれ

女のもとへつかはしける

藤原惟成（左中弁雅材子　世号五位摂政）

人志れずおつる涙乃つもりつゝ
かずかくばかりなりにけるかな

天暦御時承香殿乃まへをわたりて（村上女御のおはしまし殿）
ことかたにわたらせたまひ
けれハ

斎宮女御

かつ見つゝかげはなれゆく水のおもに
かく数ならぬ身をいかにせん

題志らず　　よみ人志らず

さゝ波はめぐりてひちぬ山川乃
あさましきまでとどこほるかな

いさ涌や木の下陰の岩清水
いくよ乃人のかげをみつらん

本歌一首の心也
思ひ出てなをいはて
ともいふあるべく人の知
へく殊更する事
それハ此歌と云ふに流れ
人志れずおつる涙の
かずかくばかりといふの
その妙く所也と被
ゆくらん教くよしれ
かくのさへ此歌のさ
かけ見つゞけるなれ
帝乃此女御のおもを便よてこと方へ渡御を御見んて影はなれゆくと
いへるハ殿舎まての事也御数ならぬ身とかけて御寵愛はなれまし
云も御うとまれぬ身をいかにせんとて
さるものなるにひちぬ流よしきまでをいふ庸夢し心ハ明し
ほさまゝやまの下陰の影をみつらん序哥也あさき人を訓

る身を観ずる心なるべし
ゆく水の流れハたえず
分別ハ人の心の源
く浅（アサ）くなるし清（キヨ）水
ハ泡（アワ）の消（キエ）つ結（ムスビ）つするを
濁りハまどふとも
し泡とならぬ身ハ人の常
分別を忘れずてん
ますごとくなるとも
清の水乃わかれの
心ハ明るくし
清の分れてくるの
身なれ枕流消
はる乃分の身はし
小屋をまやとは
なすてし心明

ゆくゑ乃おもかけハこすゑしかり
人の心せをあはれくもみえぬ
はる雲のわかれかつゆく人とも
分別をおもへ乃ほどもみえぬ
清の水乃にごれ川乃にごりひり
つきこころをわすれなんすん
はる乃分の身をわするはくるある
こゝやといふきんゆきくえるへく
よひ人乃かやうわかおもひはくるてふ
まろやを今ともひわするゝ

---

よひ人のうへやうかよひ
叢竹のかぎりもなき花
さつひけ麻音し
丸ハ我かるし心明さ
あふも人何かひく
すられハ煩悩れば
心とこめつハ常住
名の葉よひけて
我の葉ハ何かもし
極楽の事をればひ
巨なきを見すやかるよ
しとハ巨かるみせさこ
ハ心をそう高点中
が詩り慈親倚門望不見萱草花とはよるゝ心もなし
やすらゆく浪の八百日ゆくやさき浪をいふんとて沖の鳴るなるそ

万葉集　人まろ
あふみしひとは大く成なりけれど
そのはかまうそとめつあはれ

よみ人しらず
須よし乃きしにおひさるわすれ草
みんどやはつるしるひハなしわすれも
やらるゆく浪乃まさこと我こひと
いつまされるも浪川鳴るかわ

鴻毛古郡之と奥儀
抄りおわりといふ問
りけしや濱の真砂と
銭亞と云まつまき
ねまじとし
作る人の心を
作るうちハしかば吾も
さかる人の心をつくさ
とつひけていふへあり
ん心乃てまてもわりと
也濱木綿おこ注
世の人乃ゆこたね瓶ハ
銭おむひろハ紫
乃心得はしよの心
をかくよみせまでも

屏風にみやまみえたるところかける
ところ　かねとり
作ありひとの心をみくるまみて
うしろ多めゆふへくへあまりん
みつのやまれりさをはなくり錫
まてみちはかの流りとつり
ねとちて　天暦御製
世乃人のゆきえね瓶ハかつ乃わか
雨ねよるきおもひあかなり
趣まつりて　よみ人志らす

---

銭こひ乃おもつま
心の内をもとくそ
ねにすなれ那く合
又ハ都の富士といふ
作んと富士ハ常にとく
て燎の絵ぬ不入れた
おねをふうきハらへ
うきハあわる重つれ
身はまてハ下ハ若根
まつとも上ハはらとね
はしえあすハえ昆字
らねし上ハ瓶ぶハね氣
ふすれと下ハ宗るさ
ねね是ハのをうるん
根蔓ハるると以挽

銭こひ乃はかなきこゆる瓶をつくるも
みやこれつといふれあまりを
おねをふうきハらへうはれあるまき
志るこハえあつすおまふころを
ねねあまり乃をいまん人あまりし
わまてまするのつけるりひるさき
ひとまろ
たらちね乃おや乃かふこ乃まゆこもり
いふせくもあるかいもにあはすて
よみ人志らす

せとあらも霧けはよ
のまゝと我かおもひて
生きいのちもこし大
和益田池蓴（ハヌナハ）乃也
たらちねの歌のこと
たらちねの歌のみて
とひかけて蠶乃
眉籠をそり搔
この眉を籠れるハ
見なくいふせきね
それハ見とらん序
得し歌のこゝる
女は心のうちにも恋（下）ゆふ
ていふせく心え
あるかハ何とかし

いさやまさ恋てみまくもほしかるに
こやうあるらんいかにかれね
たらちね乃おやのいさめらねハ

よのおもふさま乃まさこみなかくる
（源信明　月のかつらを取りもひとる）
とうをつくさねはのおもはの鉛に
（おもはゆる中務いさらるくし）
まうてきたかれハすすれしよ
搔くるかし侍るまよいらまくらん

中務
たちとちなくおれもしらぬされの
かれと月をへてしらめけん

---

いさやまさ恋てみます
親思し恋とひまつ
もまる君ていさあ
らねよいねまます
親思ハいさハさや
かれもみんとも恋と
いみ搔るんとし
たらちねの歌のいさ
女子人の親ハたひの
いはるね假寢すと

題しらず　つらゆき
うかゝるゆめをハすてしはとの
いまるひとしおもひあさなん

よみ人しらず
おもふくいとこふ人かあれさらむ
しらぬひくくらえねにひしき

志く幼かまて無乳英ちをせてとつきめし事をさたひもくよかなき
うたゝるかれもまますかくうつせさに内かの偏とみて一面まて別人をも
かるいこそもめ中務しハ読へしとうかめしそうくし
うかゝるみをハうきみしえて中務のうち又中ゆらんよての家しとの
かれをみてハたひ君か今そめて来る人とこえてとかしもてる系の緑之
錦かそていましょしひさかハいとさやまあ多ハ人を別をかなんさや

よ鶏夕刻やもして又娘て見れは無き縁よとも
こまくのすまきのお清し頃は枕のすきまれ風もさむくしよ今刻く独りてもねられるは身はらう次第の物なりとも
かく風よ雨の旗よは雨の旗よは雨の旗のよれやするとも雨は風よ吹かれゆくよこれは音にひゆくと称しも人の心かしこくは称すれどもわか岩のまとくせも

しきしのすまき風とさむからさ
身はあらしのよみこそはかなる
かくせりや乃ちらそいさてむとも
いくよのまんひとみこころを
わか葉よとゞめもは無路よかをし
あけわびぬるひとみころか
はかなのかさひきするみちのくれ
こまりくの千おまおゆる郷
みちの此はちら乃ちら此ちるまち
こころでさくとも見ゆるきみかな

---

あはよらつゝね鶏から人のこゝろにかけりともあふよのかゝらひさき毎夜のかきさとひみけて片物あする臭別の鶏とうけらぬ毎なれ自由なねはいは只まりまかりく守りとも
みちの此安座の原安座は安らの名をもさつるとはん席家とも
○月のゆくらんかたも我古へはおつかなくいつふかりやんとさと○月のゆくとさひ秋の果とさいかし音のくおりひまやおひとね

伊勢

とし月乃ゆくらんかたもおもほえず
秋乃はつかりひと此見ゆまでに
おもひきやあひ見ぬよの年月を
かぞふるかずもあしんよのとも

源經基

あらまあるかくれもかりふこころある
されて人乃ちる無よのゆくん
ことをきおもりおりふ人をまちて なく
雲のかゝる人をまるまるはまかりい

心ハなきつゝ久しくて
つきらん中ニハ思ひさ
あらしし
えうつる利ふと通
心ハし
御のる人えをなる
みおすきさかの人
をこそのわ遅よ
思ひやれハ思えてる
之御お元朝の縫
ようにおもて御あま
心ハし切する心云
の分付る事し
わか心るみちの言葉
思りよわゆる
なる思考いれ

わかこゝろさへかはりはてぬれ

みちをまもりてよくしたかへる

人九

よそにおもてはかなに見ゆる妹か家に

そやくいさしんおゆめくろてま

狂きても よき人きても

わか心るみちのこゝろてまし心あらそへ

きゝもしこすゝめのれいあけ

（東三条兼家公 諱道綱公父）

入道摂政まかりけるにかと

をおそくあけゝれハ立わつらひ

---

思ひハまさりもせト
はてきいさめらし
我婦あのいさめさ
ゆへ頼ようるも
なけきつひとりねるよ
云首之門明る君さく
立都中を佇るを秘て
独ねる夜明る君ハ
いかりなきもれと
さるこゝ石寄進
なけきこる人いる山の
秘さをあんとこるま
うそもれとくしハ
事くおやし斧の柄
こハ王質か斧の柄の

ぬといひいれて侍りけれハ

右大将道綱母（兵衛佐倫寧女 古今三美人内）

なけきつゝひとりぬる夜のあくるまハ

いかにひさしきものとかはしる

よくきても よき人きても

なけきこる人いる山乃そのえ乃

れとくきてもまわりかゝるゝ

そこらひせんとくく山かこゝろ

侍るるまさとの人かつゝりゝる

人かふきてせく入ーおくる山よ

杉するゝみやは集十九
ひとのこれてその夢の
わかしるを行るゝハ
此心からうるや此言歌
こゝろの人志て好と也
人々にしりてせて人
山すくら三の心ほえ
られねるをいかつさり
新さうく袋つらきの
上るにて人の新歌そ
得かつきむそれかきを
いひくするは此読をえ
るふかく新歌をさ
し男もちかも志てられ
いかましきて兆せと
若かひゆす人しもかれ代ハ

こひしさはそれにねきうしん
ふたりかむすめをとも有まち
さわくのちかへしを思ひしはかりけす
とてかきはなくはかりける
新しくおやつかさみすゝすめかなる
みなとは我身乃うさも志くまで
こゝ志くも　よそ人志くも
おもひすてす人しあはれなりすかくと
うつまるけとねそのかゝらく
わか袖乃ぬるゝを人のとかめすは

---

又移し人のさひけすを
とらけまし此読の花
新とてもにゑさめるを
人ハ羊で独歌ぬるを也
わか袖のぬるゝを人の
兵の月ゆるねの子
つくすねとふ此哥よの
歌をよめるとし
かすかのね男ハさてよ
ねぬるね男の及ハねと
こハさひ歌ても有そ
斯稀くてハりせよ
とよふすすおおけ子
やとも
ゆめさへ人のつれなく
心くあまりて
見る夢のうつゝまさるハ

ねよとふやもくあくへきさかのを
元良乃子こ京れ命婦よ物いひ侍ち
ころとき女乃いひはなりける
むすめね男ハさてまにかくれとく
いよせよあふめぐらしん
さいさりとも　よそ人さりとも
ゆめふさへ人乃はれなくつれハ
ねくもはめてもとめそこうさく
見る夢乃うつなるハよのつねす
うつ乃ゆめすかまらす

見れ現に見るいまの
常し現に契し人の夢
とおもふかへるハ嬉しき
あふ事ハゆめのうち
さえくにもうれしく
人の夢に見る情しと
わすれよゆめに契り
雲無くゆめく見下
こ契り約ハ謀りつき
心機よりて変すれハ
こしゆめ現對で苦
何しとは命を（何とし）
惜のみもとの出行く（あり）
かりき身も命ありて
逢んと思ふはけり
そうし彩古對でこそ
ちはやふる神のいかきも　逢ふ命も惜まれぬ神のとがめもさらで放ちもせんと

あふ事ハゆめのうちにもうれしくて
ねさめこひしきわひしかりける
わすれよ夢とちきりしことの葉を
うつゝはうきこゝろなりけり
何としとはよ命をおしむらん
わすれそかくもあかねつきみを

柿本人丸

ちはやふる神のいかきもこえぬへし
いまはわか身のおしけくもなし

---

菩提法師ハ集乃
作者也
あくまてし世にすめる
同僧と成て世界海を
あくまてハ菩提と
同渡り流れて一示（ます）
なりんとし母の心遠
但し屏風云々
なそすも無某の愁
の淵れハやや社常へ
東人念ふる禅唐詩
まかんにて隣詩の見
なよへりいをいかへし

# 拾遺和歌集巻第十五

## 恋五

菩提法師おやされて侍りけるとき
母のいひはべりける
あくまてし世にしらまし海となりなん
おもしなきさうなれよるへく

題しらす　人まろ

住よ乃きしにむかへるあはちしま
あはれときみをいはぬ日そなき

よみひとしらす

往昔乃まよむかる
哀盛見まやさの思ひ
すてゝみん命をいま八
父母を盛るハ歎男に
御られハ無事將来ん八
のちを歎れよ去世ま
てハ色一しを合てし
いきさきんこの心り
無事死すりく座
まれさ時もいかる留
あまれハ二度物さるし
をもそてさひとこり
生る限ハ忘れやき
の心し侍とある哀
乃世る期あれハさひ

すてゝみんいのちをいまハいふのまれよ
なからへきこの世ならねハ
いきさきんこのこゝろからひせん
みさるひとのをおもひたるもし
もしえてたひとおもひんこきふて
人をおもひのやまんこうりせめ
いかりさまゆきかれらん世のならひ
男乃おもひハこうりひとしはうられ
おもへんとおもひしかけね世の中そ
あらく男をうちあけりさわりける

---

さ火まよりてこし
いかりさまゆきかれ
我身世よあくハうき人
もみみ衣とさりんりを
おもへんとおもひかけね
かくされね男ハ一命よ
將来んと云ハ志のく
うき身をも殺ねをも
とうれと歸り此ねり
貞女の二夫をとらねや
乃心あるよめりや
世の中此うきもつらきも
百堪忍されハさひ知ねと
久るらふつもさと歎き
ひとつまに志まハいかに
一命り死るハいかに
しうき身ちよし歎な

いかそりておもふとのりこいまさらよ
たりまことをりまれそこのまん
世乃中にうきもはかなき志のまきハ
おもひ志らすと人やみるらん
ひとつまに志よハいかにいはゝあれ
いきてかひなき物おもふ男そ
人まろ
こひすまに志ぬする物よりまよせハ
ちらひりわまハ志まかゝりかし
万
無く志ねこひく志わりや聊母子り

ハしねはてもいはる
身ハとし見捨るまで
恨むばかりの身より
無事ふかふする故に
切なる恋の難止さるも
こひてしねとよや
とみ人のえふくりける
と説たはかりてのさや
こひしきハ無て死ね
それも重ね心須し
無つきさへらくさめかね
菅原伏見ハ大和ノ伏
こりふ須ぬけれし昇
重之集ニハ東宮ふ百首
の内よりるりの言し

わか家のとをまきくゆくらん
こひしさハ無て死ねやむかしれ
みちゆきさんりてはくもるさ

重之

無つきさへあくさめかねて菅原や
ふしみありてもくしねまさりける

よみ人志らず

こひしさハたまり出ても見えらくに
いつあるときむねりしらん
志のさんり無それね忘き無る

---

こひしさハ名も出ても
名ハ捨りしむ思れハ
りよわり心須るも
志のりんよ思これねき
堪忍する堪忍する人
き無るやくし人の
はしきにつけて思く
思ひてくさふさるも
いそくことふるを
は無きその袖志ひる
へきをほうる慰めさ
すけるよのやるも
うきあるく折りの
つきぬ人しさひ年を
くらみ須ねさせ
わりなや志るく

はしきすりつけくやさいしちるらし
せつらる

大中臣能宣

いそくことふるころをあるとそめて
のちれ世きくあふのをおもう

さいしちす

よみ人志らず

かきりなくおもふこころ乃ふかされも
つきもしちくねよのりそはかりける
わすられやしたるし子のむ心郎
はししとう門におもふよのつう
うしとおもふ人のこひしきハ

あるやまに深切に消しことなり如何る人の此歌並二十二之撰集二見舟あまりにありし此集に皆まうすす有口訣身はうきなと人のつきととをハ其身中よりさうり出まて人の口はねと人恨るを顕て淸るもさりとよりえ逢ぬ身はうきなと人のつきといひ恨んとする男乃我とはそれ如何る心りとも云んおりすやとはしとハおりに弱りてつらいとといひかへすり

いつとても其のこころあるまじん
身乃うきなと人乃はやしたておもふ事
我としハいくしわすれかねりたれ
はらしとハおもふ物かこひしきハ
われなりかねしねこころなりけり
つらきそもおもひきるやハわりさかふ
深きさん人しもまれをうらむる
こころとハ深きさ物おもひ蛋て
我としとおもふかりつこ無つき
ねさかやえりとまも云はねよ

無つきハ我心乃我よあるに無とうけし也つらきをもいひきる事我よりつきハへも我を恨るハつきさとよるりとおひとるかよる云ひたりしをとりて恋をかりめするとこころとハつらき物顕して人の様てえあらてよめるも

かたしきのかりてこころあるまし
物おもひ捨る女乃房はゝれなく
待くさなりてすなれとそ

一条摂政　謙徳公

あはれともいふべき人はおもほえで
身乃いたづらになりぬへきかな

心とハかくり安くつきさ物をと恨しひきまさたけ出し無きて上ても人をもやをはしと云は侍り無事まさし都ハ持し只あるの都よ見てつと使るも侍てあさまやえりとこふ恵りかのかなし侍の忘れりこさをよめる歌也此人とみるとも悟すすまるかり侍の人しかくなす立てふハ心も親の学あるかもはし只我忘れぬ心あるもしあさまの我心やよの成るるしあはれともいふ事人ハいとしい恋死ぬるも皆女人乃歎といひて我おもひ恋それ

いかによ死ぬるかもはかなきにそ恋しき人ハ今ハなきこと知らぬか
されハなきこそあひ恋死ぬへきなるをも恋しかるらんも
さもこそハあひみん

躬つね

さもこそハあひみんことのかたからめ
わすれすとたにいふひとのなき

伊勢

さりともと思ひて恋ひ見
ん事のなきをはさもし
かりあさはハ恋
されとこそいへせすとい
ふ事かなよすなき
よさもあらハさこそいはれ
こともさ合せけれや
あかつきの歌けさの事
急きものなき歌事の
をとハ独寝するよ
ありを云て末の事ハ
根をと云けりと

あかつきのなけきされともとこぬれそ
ひとりねなるかおもひそめける

藤原有時（あるとき）左中将恒興子

おもふこと乃きミの身ひとつ乃うきうきよ
なつきの世をもしらすつれなるかな

つらゆき

おもひとのかくれひとつの
此身ハ思ひれねそれしら
ふるそて心みれおち
きかよまて世をまちつ
らめ志て見てそ
あしひき乃かゝるやれさき
おくらかハ八雲にあつる鵜
そこすみすこゝるや六
鹿猟る矢ニ亦軽矢（日本紀）
何しけり乃おかゆく波乃
浅ちか吹風よ沖か立
ゆはしみやとえん枕
渡し恋死ねとも恋わ
みの心ハはかなしとも
かきくもり寄する川の
瀬の波のかこ波ハ深き

人麿

万
あしちおの乃かゝるや乃はまよる鹿し
いとわれからうらのをしおもひし

万
何ゆゑか乃かゆく波乃おもころ
我ハおもふこひハ志ねとも

万
かきくもり寄する川乃さゝらなみ
まことも人乃こひしかるらん

万
わかこゝろや雨乃中きもこゝろん
あかれなきしみかりこころかれ

つらゆき

さぬれハこそ序なり
わらくや沖の中にも
如我ハやさし心有し
かゝる事まれくしもぬれね
有りかくしもぬれぬ袖
も無據ハ物語に在る
もねらさし聖にそ
ぬれぬる人われぬは無数
の上をつらくおもへとさし
これをよふ噂をわらふ
む涙を古雅を知りや
まきなる我もなく
奔なる無子は内信なる也
涙の降りおもひさき
君なかるらしのなる

かる事りいてもぬれぬ我袖乃
涙かなりつひちかきるかな
よみ人しらずぞ
万これをふかきゆかてにおもひかる
あやさをのこふのまなんれを
きみなる我ハひさしくなりぬれを
袖りなみさもかりねへらぬより
君なるなくもみれる袖乃うちも
いかにまかりもくちなしねぎさ
またしくねざひをもゆる我君乃郷

袖の浦出羽の国よ
袖のつらく枕るを云
とそ寄なりとも也
浦ニハ最なれハこ
まてきてねさひよ
波の河中にそとゆれ
ハ東岸有れさひと
そり火なるとも
風をいたみこそねぬる
風吹やぬれておるぬ
泊する舟の袴きさ
を我信さにさを
へつひて京都に制せ
られてえりぬるを給
せんとや手なしても

さるハなみ川乃中なく
女乃もとよまれけるとぞこの
ぬれぎぬせし物なれを
源京的
風をいたみこそねぬてまどろみする
あやみをおもはでかくや信しん
頭ちりそ　よみ人しれぞ
世をさやみさとおかして　そのかわりにも
はきさせねばのこしておかれつ
我らもしらずは大人いかにこへも

心ハ消し
我こゝろ消ぬ也人ハ
是ハ消なり
是みりしろうとようとも
ゑまきらわをしふるよと
りやれうきさ益ありと也
しろ乎てハ宮もぬる子も
奥義云猪の宰乃汝洒
れハ絶ぬ人の汝ヲ入
まる種ハ多かるまゝに
て人をこゝろすハすへて
こゝろハ多き中を隠
しるしをはへり
益二よりは幸数に
いそねかさまる山もまけも
伊勢物語ニハ山ハ下也

いまゆくすゑてもおもひとら坪を
坂ノ上ノ郎女（ヨトメ）万葉の歌也
（万葉のことばも）
是みりしろうとよう空も坪かるまて
かるこひりハいまもおもはざるよ
しわりくハ宮もぬるうち乃吾もおれや
見らくすへきこみくのかわき
しら乃あめれハまほらせるくにかひの
（益二條とあり）
かのうりひとゑ見るよしもうる
いそねかちかさまる山もまけもとも
おもぬ月らすをこひやわるらん

おハね月多く隔つや
とはわ吾言吾山賤を
隔れとも宮通ふる其
ハ多るを隔せハ山路を
隔されとも隔りすて
忘れるまし
あけきこゆる山路ハ今も
木をこゆる山こそあれ歟
きこゆる山ハ人もしらぬ
我宮のとりえやかなる
乃きハかわすましく
おきわたる宮ひのある
思ひをたよ深ていう
うれ煙の中と歌之
とおひの多きるへと宣（ノヨフ）し
うしみけるひの子守

若菜之时
あけきこゆる山路ハひとりしらくもり
わくるの子はゆくりゆくらん
円融院御時少将更衣のもとふは
つかはしける
（円融院の御製）
かきわかあきおもひ乃宿よみちぬれハ
いくら乃人みか雨とあるらん
御返し　（更衣の母し）
うれみけるひ乃くみわ雨とおもへ
あはれなるひと乃国まうみてまし

注にあらぬひの焼尾
こゝろハ我も物ふひそ
通る月よみゆきをと
さもあきやうんもしむ
称ますハはれまさも
思人ハ難もく妹ハ我く
すゝあきへと歌くあまり
まそしも我ふ殺つれる
きもつし抑汎むゆへ
欺をうる帳めき
うつしと観ずるもし
一説汎めハ彬娘語り
乎しと汎むもし共通ス
ほしけれと帳る限り
帳らそりくしかひる
きゝ人を歌へもして

題しらす　　読人しらす

おもはすハはれまさこともつらからし
こゝろそひとをうらみはつる那
はしなれと帳るうきかりあひなれハ
このもしまれぐねらうまのるれ
それまあれや志ふ乃衣かくしはつそ
なまひすめすりあるへかりける
かのもしも我をこそおもへあくさおの
あゝとやへ人乃とははれもせね

延喜御時承香殿乃女御（延光母）のうた

ありける女のもとよりのちにやりける
まかよひ侍るとてのちにいひ
つかはしける　　承香殿中納言（撰作者）

人をとくあくた川てふ津のくにの
名にはたかはぬものにそありける

さいしても　よみ人しらす

かきりなくおもひそめてしくれなゐの
ひとをあくまて我かつらさりける
おもふらんみなしとこのめならなと
うちよせくるこされ風に

うらめともしかまわを
てその見し帳とふさ
にもおもねハ物もつれ
ますてはらく汁とも
それまのあやふ衣
くしほハそかやうり
何く思ひ志事人物すく
との思ひやる心もし
あのうしも我をこそ思の
心のほともの別ハ指ほ肥
ほあまり同名の下なと
人をとくあくさはてふ
人をなくとらふ名すさ
ちかまてらる又こゝろ寸
さし大和物語君まうきを
我よも難波て指ほさ
かさねもくおもひそめ

深くおもひそめしゆへ人をおもふ心のいろハひとしほくれなゐとし紅ハ灰汁（アク）

まくにとそゝぐ程されともふかくおもひそめしゆへうすき須の縁をうけゝり

紅をそゝきてもみえすとおもへりし人をおもふ心のつゝむてもあらはる

おもふ海乃浦とよめり　そいふハ後撰ニ越中有磯海の浦

かく風のやむ時もなく　均子内親王此歌まてよめり後も思ふ人にみするとよめり

名にしおふとみえたりしをいひしとてありかたきみるをのとみえたり

はかなれと人のうハの空す

人のこゝろハねつましきを察

恨とハ心一ツにふかうるを

思ひねる見浮を愛語よ

いひて浦乃なと浮き

恨ねもこそうくく

心ハ明も伊勢物語に心

よそうかるやあらん

とおもひ出ひてとるを

---

はかなれと人りハうハの空すみうそ

うしみつのふかきこゝろひとつけり

恨みねもうきこゝろにかゝるゆる

よのむころ乃あまきのとおもいそ

おもふなるうら出乃をあめふりちて

うらえや世にしひとのこゝろを

---

源氏思ふくらしとよ

御すゝめ乃勤ねき望

思ひともえし世の宿よ

あまりけるかの心す

よと宮ひおもひやし

あふみなる打出浜の

うち出てをいらん枕

須也須よ打出てるも

心ハ明も

---

わたつ海乃みかき心をあるをなかう

うしみつきぬるよのりうちもるる

むすふねかハこゝろふかめかかん

おもひきてうしゝすいさるへく

うしみつ乃のちさへ人乃つうかるを

いかひくゝねをもあるまし

---

わたつ海のみかき心ハ

わたつ海ハみかきをいらん枕須也恨も留んかて心ハ明とし此歌大和物語

よりハ延喜乃御時とみえてよく浮き心ハをきなのとなる

かすあかれ男ハ　物かなね男のく人の恨てもそれあてゝるかもさ

男とおもハ一向思ありて　物けうめしきもひきて恨うハたかし

とはありしいま思ふくる人のうめき心をふくらうねたかれたる

うしみつのちさへつまき人を恨るハこそ恨めきるをやめさせん

さめやらし悟そそのうつゝやまするく語つゝりてハはるかと云
てねをもちんとうしみゆくるけくさし

君をなをうらみつべ
古今書乃うるふ
すむ虫の我からとは
とらまへぬ世を字
とゞ非ずそよあり
人乃つきも我とり
かくと云理を言て
君を恨れ根ぶよくと
あまれるをよすむ
我から乃理ハ時ぞ
と思ふハ知りけれど
君に知て深く人のつ
らきハ我から聊なれと
とひしひぬらるき

小野宮乃おほいまうちきみにはゝり
きゝける
閑院大君　（源宗于女）
君となをうらみつるかな蜑のかる
もにすむ虫乃名をわすれつゝ
鄙注す　よしひとらす
あまれるをふすむ虫のなれきけと
て我からはしきさなかり
こひしひぬらきてもあくさめん
いつまでなみすみれをやくあるらん

長河渡ハ飛川風
也亦ゐひかれハりの
渡る乃藤家も
ゆきちんく蜘ゝき
さひもなくさめん
とや
かくそうつしとさふ
二心ある人を恨みる

かくそうつしとおもふにひしきハ
これさへこゝろにうつりおもひかり
人まろ
とにかくに物もおもはすひださくみを
うつすみなハ乃たゞひとすぢに

りとも無きハ我さへうしとおもふこゝろと無きかけれを
とも我さへとおもふ心をはなくてうきすて無き不義なる意
とふかくよ物ハ飛騨すれハ飛騨たくみハむかしハ土ひきれむかしよりの説
延喜式　飛騨國毎年貢匠丁一百人其匠準諸國
調庸例ニこゝろうのこゝろハ言ふかく言ふかくをもつて只君を一すぢに
とりてはんとそうりするハ乃と守ありし言方ふかくハひさく人乃こゝろ

右大臣の女御
（本云述子清慎公女）

いにしへをさらにかけ
むかしのことはさらにかけ
ていひ出じと思へども
あやしく云めりを
かなしと泪のみちて
かゝりきると
はかなくとは心もあひて
念ひあまさり
われは我忘れさるは
よそ事となるや
思ふすゝ逢ふは難く
さてかくてさや

右大臣乃女御うせ給ひければちく
おとゝのとりはらひける

**天暦御製**

いにしへをさらにかけじと思へども
あやしくめにもみちまさる
めのことはりなる

**平忠依**（隼人正　右中弁希世子）

はかなくとは心もあらで（すつくり）つゝも
さやかにもちぎりしわすれなでねと
さいちるをよみひとちるを

---

にこれ果てやえ
契約せしさいはら
さりしわかれを
わすれてかいさゆゑ我
わするゝ人はこるて
みやこにいさゆきはいさ
ゆこるも人のかう
めさるさるは我も思
れんとされども我は
こゝろ人に去さり
ひてはえこるもいさ
この心を合めてるを
ますれぬる君は中く
心のしまうて
こゝろ叙さと
我たのわかれを心

万わするゝかいさゆゑ我をもわすれなん
ひとりきこふこゝろともなく
わすれぬるきみは中くはかなくて
いまゝていける身をうらむる
我たのむわかれを云んひとゝなる
さてやうきを世をこゝろん
あやしくもいとふにはゆる心かな
いかにしてかはおもひさむべき
おもふらんすてゝ我のかはるよ
去てしわすれてこゝろ流さなん

人乃おもハぬ故ニ世
をも愠して侍る事也
あやしくいふもなき
ものとはいふ古語也
無き心ニまかせる
を御心あやしくも
いふまでゆる心にと
いふなるハ心明也
若かるりなすも許
正気成能せしめて
無世のかるのこなし
りある身る心を付まで
さる侍ことわりの
無信でよく志ある哉
かゆまるを侍くまれ　鹿嶋筑磨神常陸也てくとの枕詞ともいへり

ときまさ更り侍りける人家に侍りける
（ちるをみるをのおもふや是）
おもふをそちのまくにこひわたり
（をて無へのありし）
てふさらとは不そて侍りける
さる心にもわがあくこそ、わするゝわ
みやこの人はきゝやはくらん
さいきこてと
かりまするはまみ神のつくさ
わか身ひとりはなをつくる